

解題

五山堂詩話 十卷

收二卷

菊池 桐 孫 著

菊池桐孫字は無絃、五山、娛庵、小釣、合は皆その別號なり、左大夫と稱す、讃岐の人なり、江戸に出で、市川寛齋の門に學ぶ、遂に止り住し、帷を下して教授す、特に詩を以て鳴る、文政中高松侯擢んで、儒官とす、安政二年六月十七日歿す、年八十四。

山本北山、僞唐詩を排撃せしより、海内靡然として宋詩に向ふ、然れども其の謂はゆる宋詩は、眞の宋詩に非ず、五山は市川寛齋の江湖詩社に入れり、故に又僞宋詩を排撃せり、此書は多く同時の作家及び社中諸子の傑作を録せり、此書によりてその人と詩とを世に傳ふことを得たるもの亦尠からず、時に古人詩中の典故熟語等に就いて攷證する所あるも、其の所長に非ず。

五山堂詩話序

話桑麻者農夫樂事也，話利市者商賈樂事也，話詩賦者詩人樂事也，話也者，非論非議，非辯非彈也，平常說話也，有是話而人聞之喜之，快之，笑之，記之，忘之，一任旁人所取，是話者之心也，有是話而人聞之，惡之，忌之，厭之，嫌之，拂之，只觸旁人所懷，非話者之心也，農商之話皆此心也，況於溫厚詩人之心乎？當開口說話之時，暫有是話，及閉口說完之後，曾無是話，話之爲言，如是而已，今話而筆之，此果何心哉？農商不識文字，故其話止於口頭，終於一場，僅及對面，數人，詩人則識文字，故把口頭之話，化作筆端之話，把一場之話，化作千萬場之話，把對面數人，作不對面千萬人，唯恐聞之喜之，快之，笑之，記之，忘之者之不多，是詩人之心，而詩人之神通力也，詩人之心

既如是詩話之作豈苟且也哉吾友池無絃作五山堂詩話質受而
 讀之既無可惡可忌可厭可嫌可哂之語又有可喜可快可笑可記
 之筆雖無論議辯彈之圭角自具春夏秋冬之氣象不欲以自己才
 識壓倒人才藝又不以他人才藝漫滅自己才識溫溫乎聞其說話
 凜凜乎見其才識自云此客歲之業也今刻梓以傳之世今茲之業
 且待來年傳之來年之業且待其又來年傳之年年如是且待積年
 之久而成一部若干卷詩話唯子爲我序之質因謂此一卷是開宗
 之首撰竊以讀易之法讀之此一卷其乾坤二卦歟自今以往年年
 續成變者年年變而不變者竟存焉將見其一索而得震巽再索而
 得坎離三索而得艮兌三男三女交互相配六十四卦無之不變而
 吾知乾坤二體確然隤然未嘗失其本領吾又以觀水之法讀之此
 一卷其黃河發足之崑崙歟混混不已千里一曲或右或左其高在

龍門懸瀉千仞，其播爲九河，其同爲逆河，皆可料想，而吾知平準格
 物之性，未嘗失其本領，吾又以候花信之法讀之，此一卷其梅花初
 綻之時歟，嗣後陸續，風信不差，其高杏桃梨李海棠木蘭，其低水仙
 蘭棠棠棣牡丹，白如縞素，紅如胭脂，小如棊子，大如盂盆，百般精神
 百般姿態，皆可料想，而吾知向陽背陰之性，未嘗失其本領，吾讀五
 山堂詩話至此，境不亦一樂事乎？作者得讀者，至如此，不亦一樂事
 乎？話之筆之者，在吾友池無絃讀之序之者，在其友葛休文，不亦一
 樂事乎？今刻而傳之，于千萬萬之人，其爲樂事，竟無窮盡矣。

文化四年二月十五日

五山堂詩話卷一

娛菴居士著

古今題鍾植詩、率皆長句、近體絕少、惟明蔣主孝云、虎口虬鬚真可怪、如何不解縛人妖、儉花竊笛渾閑事、忍看三郎萬里橋、嘗見備後詩人嘗禮卿題圖云、于腮睥目突其冠、相見腥風送筆端、別有變唾君識否、沈香亭北倚闌干、○按相想此趣意趣極與蔣相似、結全用李句、殊覺警拔、只第二落筆頗粗、疑其不類、後逢禮卿話偶及之、乃云、此原七古、一時截書以應人需耳、余自喜見之不誤。

人動輕近體截句、而重長句累韻、不知雄作大篇、只須學力滿腔書卷、矢口發露、譬如

古今鍾植に題する詩は、率ね皆長句にして、近體は絶だ少し、惟だ明の蔣主孝云ふ「虎口虬鬚真に怪む可し、如何ぞ人妖を縛するを解せざる、花を偷み笛を竊むは渾て閑事、看るに忍びんや三郎の萬里橋」と、嘗て備後の詩人嘗禮卿の、圖に題するを見るに云ふ「于腮睥目突たる冠、相見て腥風筆端に送る、別に變唾あり君識るや否や、沉香亭北、闌干に倚る」と意趣極めて蔣と相似て、結は全く李の句を用ふ、殊に警拔を覺ゆ、只だ第二の落筆頗る粗にして、其の不類を疑ふ、後に禮卿に逢ひ、話、偶々之に及ぶ、乃ち云ふ、此れ原と七古、一時截り書して以て人の需に應ずるのみと、余自ら見の誤らざりしを喜ぶ。

人動もすれば近體截句を輕んじて、長句累韻を重んず、知らず雄作大篇は、只だ學力を須ら、滿腔の書卷、口に矢つて發露す、譬へば富貴の家、供張餘り有て、然

貴家、供張有餘、然後數十百客不難措辦、求詩妙處、全不在此、絃外有音、味外有味、會到此境、二十八字卽摩尼寶珠、何必造八萬四千塔、方始爲至哉、故作詩者、不可賣博以嚇嚇看詩者、不可眩多以誇弊也、唐人句云、藥靈丸不大、棋妙子無多、眞上乘之言。

詩弟子高邁、持後赤壁圖索題、余傲坡公歸去來集字體、題二律云、良夜如何得、復登赤壁舟、細鱗魚已有、斗酒婦相謀、月影蟾巖起、水聲斷岸幽、江山無幾日、識我昔遊不、四顧舟中寂、橫江一鶴孤、放流將半夜、就睡亦須臾、夢有來過者、笑言遊樂乎、玄裳我知子、開戶起相呼。

山本北山先生、昌言排擊世之僞唐詩、雲霧

二

る後に、數十百の客も措辨し難からざるが如し、詩の妙處を求むれば、全く此に在らず、絃外に音あり、味外に味あり、會して此の境に到れば、二十八字は卽ち摩尼寶珠なり、何ぞ必ずしも八萬四千の塔を造りて、方に始めて至ると爲さんや、故に詩を作る者は、博を賣つて以て嚇嚇す可からず、詩を見る者は多きに眩して以て誇獎す可からざるなり、唐人の句に云ふ、藥の靈なるは丸、大ならず、棋の妙は子多きなし」と、眞に上乘の言なり。

詩弟子高邁、後赤壁の圖を持して題を索む、余、坡公の歸去來集字の體に倣ひ二律を題して云ふ、良夜如何んか得ん、復た赤壁の舟に登る、細鱗魚已有り、斗酒婦と相ひ謀る、月影蟾巖起り、水聲斷岸幽なり、江山幾日なし、我が昔遊を識るや否や、四顧すれば舟中寂たり、江に横はりて一鶴孤なり、流に放ちて將に半夜ならんとす、睡に就く亦た須臾、夢に來り過ぐる者あり、笑つて言ふ遊び樂しきかと、玄裳、我れ子を知る、戸を開きて起ちて相ひ呼ぶ」と。

山本北山先生、昌言して世の僞唐詩を排擊す、雲霧一

一掃蕩滌殆盡都鄙才子、翕然知嚮宋詩、其功偉矣、余謂先生曰、僞唐詩已廢矣、更有僞宋詩、可謂又生一秦也、何如、先生莞然、蓋今日之詩、虞山所謂邪氣結轡、大承氣下之、輸寫大利、元氣受傷、則別症生之時也、誰居瘳之者、必當有任。○按、任、疑在之訛。

乙丑、余再歸江戶、河寬齋先生見贈云、寥落江湖舊社盟、相逢重作不平鳴、世人久被法華轉、後輩誰教俗骨清、薄倖杜郎年未老、衰殘白傅目幾盲、張軍今已屬君手、肯許成他豎子名、余雖不敢當、私心竊向之。

余名節不檢、嘗在伊勢、題一酒樓云、百壺醴醪碧於油、月逗樓心興尙遒、粉黛有緣通一笑、襟懷無地貯些愁、紅絃珠唱偏宜夜、風檻

掃して蕩滌殆んど盡く、都鄙の才子翕然として宋詩に嚮ふを知れり、其の功偉なり、余先生に謂ふて曰く、僞唐詩は已に廢す、更に僞宋詩あり、又た一秦を生ずと謂ふ可し、何如と、先生莞然たり、蓋、今日の詩は、虞山の謂はゆる邪氣結轡し、大承氣もて之を下せば、輸寫して大に利し、元氣傷を受け、則ち別症生するの時なり、誰そや之を瘳す者、必當に任するものあるべし。

乙丑に、余再び江戶に歸る、河寬齋先生贈らるゝに云ふ、寥落たり江湖の舊社盟、相ひ逢ふて重ねて不幸の鳴を作す、世人久しく法華に轉ぜらる、後輩誰か俗骨をして清かからしめん、薄倖の杜郎年未だ老いず、衰殘の白傅目幾んど盲す、張軍今已に君の手に屬す、肯て許さんや他の豎子の名を成すを、と、余、敢て當らずと雖、私心竊に之に向ふ。

余、名節檢せず、嘗て伊勢に在り、一酒樓に題して云ふ、百壺醴醪油よりも碧に、月は樓心に逗りて興尙遒なり、粉黛一笑を通するに緣あり、襟懷、地の些愁を貯ふる無し、紅絃珠唱偏に夜に宜し、風檻露蘼秋を平

露簾平浸秋、薄倖自知如。小杜直將此際、做楊州、膝祭堂、遂鑄楊州小杜印見貽、先生詩中仍用此語也、後海螻齋爲余盡言、自此斷然不復以小杜自期、印亦捐而不用。

螻齋、字君玉、余受知最深、二十年殆如一日、雖不任爲之妻、而竊推爲吾黨、獻子螻齋當路無閒、猶且以詩畫自娛、數年諸作、殆滿紙囊、囊腹彭亨然、就中拔數十首、使余加墨、因得窺其腴、立秋云、大火西流雪改容、向來炎氣欲無蹤、西風能有拔山力、忽地吹崩千萬峰、夜泛云、舟過柳港入蘆坪、兩岸鳴蟲和月明、北岸如悲南岸樂、細聽南北一家聲、村夜云、槽榼爐頭煖夜煙、團樂酌酒話豐年、今秋有聞輸租早、不似去秋猶在田。

浸す、薄倖自ら知る小杜の如きを、直に此際を將て楊州と做さん」と、膝祭堂、遂に楊州小杜の印を鑄して貽らる、先生の詩中に仍て此の語を用ふ、後ち海螻齋余の爲めに言を盡す、此より斷然として復た小杜を以て自ら期せず、印も亦た捐て用いず。

螻齋、字は君玉、余、知を受くること最深し、二十年殆んど一日の如し、之が妻牧たるに任へずと雖、而も竊に推して吾黨の獻子と爲す、螻齋は路に當りて閒なし、猶且ほ詩畫を以て自ら娛む、數年の諸作殆んど紙囊に滿つ、囊腹彭亨然たり、中に就いて數十首を抜き、余をして加墨せしむ、因て其の腴を窺ふを得たり、立秋に云ふ「大火西に流れて、雲容を改む、向來の炎氣蹤なからんと欲す、西風能く山を抜くの力あり、忽地ち吹き崩す千萬峯」と、夜泛に云ふ「舟は柳港を過ぎて蘆坪に入る、兩岸の鳴蟲月明に和す、北岸は悲むが如く南岸は樂む、細に聽けば南北一家の聲」と、村夜に云ふ「槽榼爐頭夜煙煖なり、團樂酒を酌んで豐年を話す、今秋、閑あり租を轡すこと早し、似ず去秋の猶ほ田に在りしに」と。

樂堂名博、與余交好、其詩務要出色、或嫌其
 尖巧、然亦有極佳者、蓼花云、沙村水驛自
 成叢、滿目秋容處處同、半老垂來猶未老、小
 紅蕩得乍多紅、香牽宿鷺眠鷗外、影動冷煙
 斜日中、蘆絮應嫌顏色少、嬌妝輪汝一家風、
 又秋夜云、蕉敗月窓秋有影、蟲寒草砌夜無
 音、村莊云、旨蓄一株留橘子、遠謀滿塢種松
 苗、皆可傳也。

清程羽文作詩本事、因詩摘出事典、大窪詩
 佛作續詩本事、輯至二百餘條、可謂博矣、偶
 閱島田達音集云、昔在昌齡成帝號、不言詩
 上玉屏風、自注、玄宗立王昌齡爲詩帝、此典
 二家所未載、書以補逸、按唐才子傳、王昌齡
 稱詩家天子、與此小異。

樂堂名は博、余と交り好し、其の詩は務めて出色を
 要す、或は其の尖巧に過ぐるを嫌ふ、然れども亦た極
 めて佳なる者あり、蓼花に云ふ「沙村水驛自ら叢を成
 す、滿目の秋容處處同じ、半老垂れ來りて猶ほ未だ老
 せず、小紅蕩り得て乍ち多紅、香は牽く宿鷺眠鷗の外、
 影は動く冷煙斜日の中、蘆絮應に嫌ふべし、顔色の少
 きを、嬌妝輪ず汝が一家の風」と、又た秋夜に云ふ「蕉
 敗れて月窓秋に影あり、蟲寒くして草砌夜、音なし」と、
 村莊に云ふ「旨蓄一株、橘子を留む、遠謀滿塢、松
 苗を種う」と、皆傳ふ可し。

清の程羽文、詩本事を作り、詩に因りて事典を摘出す、
 大窪詩佛、續詩本事を作り、輯めて二百餘條に至る、
 博と謂ふべし、偶々島田達音の集を閲するに云ふ「昔
 在、昌齡帝號を成し言はず、詩の玉屏風に上るを」と、
 自注に、玄宗、王昌齡を立て、詩帝と爲すと、此の典、
 二家の未だ載せざる所なり、書して以て逸を補ふ、按
 ずるに、唐才子傳に、王昌齡、詩家天子と稱すと、此と
 少し異なり。

詩佛長於七律、短於七絕、余長於七絕、短於七律、雖是世人所口、其實詩佛七絕未必短、而余何肯有其長、今摘詩聖堂集中尤者、駢出二體、以示不容軒輊、律則病起云、病起茅齋坐、晚晴竹梢微動見、風行試操筆、處不如意、新換衣時聊愜情、酒作沈痾餘、後患詩思往事隔、前生猶知神氣未、全復欲整架書無力、擊詠愁云、鬢邊抽出數莖苗、半似長城來似潮、三日苦吟無句穩、半宵殘夢覺魂消、簾垂深院伴幽獨、雨滴空階送寂寥、爭得望樓臺上酒、心中萬斛一時澆、漁蓑云、誰采嫩莎衣、樣製短篷相伴釣、滄浪蘆邊露重蒙茸濕、蘋末風生獨速涼、當酒又愁明日雨、眠花猶帶昨宵香、可憐渭上封侯日、初把渠儂博是

六

詩佛は七律に長じ七絶に短なり、余は七絶に長じ、七律に短なり、是れ世人の口に、する所と雖、其の實は詩佛は七絶未必すしも短ならず、而して余は何ぞ肯て其の長あらんや、今、詩聖堂集中の尤なる者を摘み、二體を駢べ出だし以て軒輊すべからざるを示す、律は則ち病起に云ふ「病より起きて茅齋、晚晴に坐す、竹梢微かに、動きて風の行くを見る、試に筆を操る處意の如くならず、新に衣を換ふる時聊か情に愜ふ、酒は沈痾を作して後患を餘し、詩は往事を思へば前生を隔つ、猶ほ知る神氣の未だ全く復せざるを、架書を整へんと欲して擊ぐるに力なし」と、愁を詠するに云ふ「鬢邊抽出だす數莖の苗、半は長城に似て來は潮に似たり、三日の苦吟句の穩なる無く、半宵の殘夢、魂の消するを覺ゆ、簾は深院に垂れて幽獨に伴ひ、雨は空階に滴りて寂寥を送る、争でか得ん望樓臺上の酒、心中の萬斛一時に澆かんことを」と、漁蓑に云ふ「誰か嫩莎を采りて衣様に製す、短篷相ひ伴ふて滄浪に釣る、蘆邊露重くして蒙茸濕ひ、蘋末風生じて獨速涼し、酒に當りて又た愁ふ明日の雨、花に眠りて猶ほ帶ぶ昨宵の香、憐む可し渭上封侯の日、初めて渠儂を把

裳絶則春夜云、殘雪不消如待伴、袖袂冷透
 睡醒初、夜深知是寒威重、滴月簷聲聽漸疎、
 春寒云、寒食自今無幾日、梅花零落杏花開、
 春寒釀雪力不足、却向黃昏作雨來、晚步云、
 園底扶筇步晚霞、春風輕軟弄巾紗、蜘蛛何
 事太早計、密網先絨欲發花、偶作云、世間無
 限事紛紛、耳冷如今百厭聞、自笑懶慵蘇學
 士、總將家政付朝雲、嘗與寬齋先生言、詩佛
 能於淡處著力、是其所以樹一幟也、
 今年丙寅、余三十八歲、頭雖未見二毛、鬚已
 生白、爲詩佛所擲擲、故贈余、有七載江湖漫
 遊客、相逢今日白鬚生之句、偶閱劍南集云、
 紹興壬午、予年三十八、與查元章王嘉叟、同
 出端拱殿門、二君指予問曰、子亦有白髮耶、

て冕裳に博すと、絶は則ち春夜に云ふ、殘雪消へず伴
 を待つが如し、袖袂冷は透る睡の醒る初、夜深くして
 知る是れ寒威の重きを、月に滴る簷聲聽いて漸く疎
 なり」と、春寒に云ふ「寒食今より幾日なし、梅花は零
 落して杏花は開く、春寒、雪を釀して力足らず、卻て
 黃昏に向つて雨と作り來る」と、晚歩に云ふ、「園底筇
 に扶けられて晚霞に歩す、春風輕軟、巾紗を弄す、蜘蛛
 は何事ぞ太早計、密網先づ絨す發かんと欲する花
 を」と、偶作に云ふ「世間限り無く事紛々、耳冷かにし
 て如今百聞くを厭ふ、自ら笑ふ懶慵の蘇學士、總べて
 家政を將て朝雲に付す」と、嘗て寬齋先生と言ふ、詩
 佛は能く淡處に於て力を著く、是れ其の一幟を樹つ
 る所以なりと。

今年丙寅、余は三十八歳なり、頭は未だ二毛を見すと
 雖も、鬚は已に、白を生ず、詩佛に擲擲せらる、故に余
 に贈るに「七載江湖漫遊の客、相逢ふて今日白鬚生す」
 の句あり、偶、劍南集を關するに云ふ、紹興壬午、予
 年三十八、查元章王嘉叟と同じく端拱殿門を出づ、二
 君、予を指して問ふて曰く、子も亦た白髮あるかと、
 相與に太息すと、事極めて相類す、因て戯れに示して

相太息、事極相類、因戲示云、休嗤今日白髮生、老陸當初蚤已驚、八十五齡君試算、乘來猶得九年贏、以放翁八十五而卒也、詩佛看詩大笑。

谷麓谷、名本脩、年垂八十、作詩靡靡不絕、可謂當今小放翁也、唯放翁初年詩太精細、晚年稍流頹唐、麓谷初年首首疎率、至晚年後、間有簡揀者、此與放翁異、今錄其似者、雜詠云、百事相忘意久休、雖無可樂又無憂、小園梨栗今皆熟、孫稚能爲採拾謀、初夏云、我已雖衰猶及麥、年還有聞未迎梅、晚秋云、水冷已難隨釣伴、夜長不厭對棋讎。

劍南詩、動說窮薄、多傷心語、然其中有可笑者、處處乞漿俱得酒、杖頭何恨一錢無、大似

云ふ「嗤ふことを休めよ今日白髮の生ずるを、老陸は當初蚤く已に驚く、八十五齡君試に算せよ、乗じ來るも猶ほ九年の贏を得たり」と、放翁八十五にして卒するを以てなり、詩佛詩を見て大に笑ふ。

谷麓谷、名は本脩、年八十に垂んとし、詩を作りて靡々として絶えず、當今の小放翁と謂ふべし、唯だ放翁初年の詩は太だ精細にして、晩年は稍く頹唐に流る、麓谷は、初年首々疎率にして、晩年の後に至りて、間簡揀の者あり、此れ放翁と異なり、今、其の似たる者を録す、雜詠に云ふ「百事相ひ忘れて意久しく休す、樂む可き無しと雖も又憂無し、小園の梨栗は今皆な熟す、孫稚能く採拾の謀を爲す」と、初夏に云ふ「我已に衰ふと雖も猶ほ麥に及ぶ、年は還りて聞あり未だ梅を迎へず」晚秋に云ふ「水は冷にして已に釣伴に隨ひ難く、夜は長くして厭はず棋讎に對するを」と。

劍南の詩は、動もすれば窮薄を説き、傷心の語多し、然れども其の中に笑ふ可き者あり、處處に漿を乞ふて俱に酒を得たり、杖頭何ぞ恨まん一錢無きを」と、

乞兒詩。

余貧不能貯書、偶有購得、早已羽化去、篋中留集五部、一白香山、一李義山、一王半山、一曾茶山、一元遺山、外此無有、因以五山名堂、有句云、家徒四壁立、書僅五山存。

客途淒酸、一經說破、異時讀之、不堪情景、余早發遠州、云、行李蕭然、早上程、客途惡極、若爲情、數村行盡、天猶夜、梟語松梢、三五聲、岐嶺道中、云、老樹雲埋天、未晨竹輿搖、夢認麟峒、耳邊乍聽扛夫語、昨夜前村狼食人、此中消息、非嘗旅況者、恐不及知。

寬齋先生、浴塔澤溫泉、絕句云、迅湍危石響如雷、徹夜孤燈夢未催、可怪東窓紅已抹、不聽鴉子報晨來、自注、山中鴉皆無聲、余嘗以

大に乞兒の詩に似たり。

余貧にして書を貯ふ能はず、偶々購ひ得る有るも早く已に羽化し去る、篋中に集五部を留む、一は白香山、一は李義山、一は王半山、一は曾茶山、一は元遺山なり、此を外にしては有る無し、因て五山を以て堂に名づく、句あり云ふ「家は徒に四壁立ち、書は僅に五山存す」と。

客途淒酸、一たび說破を經て、異時、之を讀めば、情景に堪へず、余早に遠州を發するに云ふ「行李蕭然として早に程に上る、客途惡極なる若爲なる情を、數村行き盡して天猶ほ夜なり、梟は松梢に語る三五聲」と、岐嶺道中に云ふ「老樹雲埋んで天未だ晨ならず、竹輿を搖かして麟峒を認む、耳邊乍ち扛夫の語るを聽く、昨夜前村に、狼、人を食ふ」と、此の中の消息は、旅況を管むる者に非ずんば、恐らくは知るに及ばざらん。

寬齋先生の塔澤溫泉に浴する絶句に云ふ「迅湍危石響、雷の如し、徹夜孤燈夢未だ催さず、怪む可し東窓紅已に抹するに、聽かず鴉子の晨を報じ来るを」と、自注に、山中の鴉は皆な聲なしと、余嘗て九月を以て山

九月宿山中、曉窓夢回忽聽啞啞、因有作云、
 夢清山驛起來遲、屢被寒鴉報曉、知怪得渠
 儂舌尙在、一生只信半江詩、半江、先生別號
 也。

先生上尾道中云、泥塗夜暝雨悠悠、斗折林
 間、聽水流怪底、月光偏布地、鶯花爛熳野田
 秋、近讀李松圃曉行云、朦朧曙色噪啼鴉、風
 撼疎林一徑斜、滿地白雲吹不起、野田蕎麥
 亂開花、兩詩不謀相同、工力亦敵、皆以誠齋
 雪白一川蕎麥花爲藍本。

蜀成王宮詞云、君王翌日宴長春、霖雨迷漫
 溽土塵、特令滿宮來壓止、一時懸挂掃晴人、
 王次回上元竹枝云、風雨元宵意倍傷、畫檐
 低拜掃晴娘、若教掃得天邊雨、爲掃離人泪

中に宿す、曉窓夢回りて忽ち啞々を聴く、因て作あり
 云ふ「夢清くして山驛起き來ること遅し、屢々寒鴉に
 曉を報じ知らざる、怪得す渠儂舌尙ほ在るを、一生只
 信す半江の詩」と、半江とは先生の別號なり。

先生の上尾道中に云ふ「泥塗夜暝ふして雨悠悠、林間
 に斗折して水流を聴く、怪しむ月光の偏に地に布く
 を、鶯花爛熳たり野田の秋」と、近ごろ李松圃の曉行
 を讀むに、云ふ「朦朧たる曙色啼鴉噪く、風は疎林を
 撼かし一徑斜なり、滿地の白雲吹けども起らず、野田
 の蕎麥亂開の花」と、兩詩は謀らずして相同じ、工力
 も亦た敵す、皆な誠齋の「雪は白し一川蕎麥の花」を
 以て藍本と爲す。

蜀成王の宮詞に云ふ「君王は翌日長春に宴す、霖雨迷
 漫土塵を溽にす、特に滿宮をして來て壓止せしめ、一
 時懸挂す掃晴人」と、王次回の上元竹枝に云ふ「風雨
 元宵意倍、傷む、畫檐低く拜す掃晴娘、若し天邊の
 雨を掃ひ得しめば、爲に掃へ離人の泪兩行」と、二詩
 は列朝詩に見ゆ、按ずるに、帝京景物略に云ふ、凡そ

兩行、二詩見列朝詩、按帝京景物略云、凡兩
 久、以白紙作婦人首、剪紅綠紙衣之、以苜帚
 苗縛小帚令攜之、竿懸檐際、曰掃晴娘、此方
 女兒亦自有此事、故柏如亭吉原詞、用掃晴
 娘、亦紀其實也。

余嘗作續吉原詞、稿已散失、偶有人錄、乃追
 抄之、詩云、孔尾交金綉帙堆、銅餅滿插牡丹
 開、多情倚柱尋思久、忽報僊郎入院來、憶昔
 垂髫始見收、月明花落不知愁、如今專得蘭
 房寵、羞被人推居上頭、歡喜心中訴暗盟、今
 生何必要來生、彩燈新獻慈雲座、照出青樓
 第一名、錦字裁成漏已闌、起看爐火小星殘、
 無端阿妹和衣睡、爲覆輕衾護夜寒、十年不
 識巫山村、却算歸期欲斷魂、今曉孃來苦相

兩久しければ、白紙を以て婦人の首を作り、紅緑紙を
 剪りて之に衣せ、苜帚苗を以て小帚を縛し、之を携へ
 しめ、竿にして檐際に懸くるを、掃晴娘と曰ふ、此の
 方の女兒も亦た自から此の事あり、故に柏如亭の吉
 原詞に掃晴娘を用ゆ、亦た其の實を紀するなり。

余嘗て續吉原詞を作る、稿已に散失せり、偶、人の録す
 るあり、乃ち追ふて之を抄す、詩に云ふ孔尾、金を交へ
 て綉帙堆す、銅餅滿挿して牡丹開く、多情柱に倚りて
 尋思すること久し、忽ち報す僊郎院に入り來ると、「憶
 ふ昔垂髫始めて收めらる、月明に花落ちて愁を知ら
 ず、如今專ばらにし得たり蘭房の寵を、羞らくば人に
 推されて上頭に居るを」、「歡喜心中に暗盟を訴ふ、今
 生何ぞ必らずしも來生を要せん、彩燈新に獻す慈雲
 の座、照らし出だす青樓第一の名」、「錦字裁し成つて漏
 已に闌なり、起て看れば爐火小星殘す、端なく阿妹の
 衣に和して睡るを、爲に輕衾を覆ふて夜寒を護せし
 む」、「十年識らず巫山の村、却て歸期を算すれば魂を
 斷たんと欲す、今曉孃來りて苦ろに相ひ囁す、細心負

囑、細心莫負主家恩、雨憊風僂易損春、兩行玉筍獨愴神、重樓一夜僂梯絕、可忍蕭郎是路人。

人生聚散亦復難常、二十年間江湖社、一離一合、吟席殆無暖日、乙己、余歸江戶、如亭見贈云、葉水心初出宦途、四靈復聚舊江湖、蓋以余當水心也、後寬齋先生祇役越中、如亭去赴信中、余亦出關、獨詩佛留在江戶、如亭寄詩云、結社都門相唱者、半江翁北五山西、竹埋深雪無生意、只有梅花照舊溪、如亭一號瘦竹、詩佛一號瘦梅、故也、余再歸、則如亭猶在信中、每一聚首、未嘗無車公之歎也。

信中詩學、如亭實開壇坫、所得人才、不下數人、而以木百年高聖誕二子爲翹楚、高則余

くこと莫れ主家の恩にと、雨は憊し風は僂して春を損し易し、兩行の玉筍獨り神を愴ましむ、重樓一夜僂梯絶ゆ、忍ぶ可けんや蕭郎は是れ路人なるを。」

人生の聚散は亦た復た常にし難し、二十年間、江湖社一離一合して、吟席殆んど暖なる日なし、乙己に、余江戶に歸る、如亭贈るるに云ふ「葉水心初めて宦途を出づ、四靈復た聚る舊江湖」と、蓋、余を以て水心に當つるなり、後ら寬齋先生は越中に祇役し、如亭は去つて信中に赴く、余も亦た關を出づ、獨、詩佛は留りて江戶に在り、如亭、詩を寄せて云ふ「社を都門に結んで相唱ふる者、半江翁は北し五山は西す、竹は深雪に埋りて生意なく、只た梅花の舊溪を照す有り」と、如亭は一に瘦竹と號し、詩佛は一に瘦梅と號するが故なり、余再び歸れば、則ち如亭は猶ほ信中に在り、一たび聚首する毎に、未だ嘗て車公の歎無くんばあらざるなり。

信中の詩學は、如亭實に壇坫を開く、得る所の人才は、數人に下らず、而して木百年、高聖誕の二子を以て翹楚と爲す、高は、則ち余未だ識るに及ばず、木は、名は壽、

未及識木名壽、近日出都、始相遇于詩佛席間、風貌偉然、詩筆最高、佳句云、心冷句中因、說水、脚勞夢裡爲登山、一生好事皆兒戲、數卷吟詩半酒媒、尋常鶯囀朝暎外、一半花開夜雨中、別後故人頻入夢、春來燕子已歸家、五言、如「秋日云、雲氣生危石、風聲聚急瀧、山中云、樹冷新秋雨、峰高太古雲、皆趣、其社號晚晴吟社、晚晴者、如亭信中讀書堂名也。

如亭晚晴堂集、詩極精細、美不勝收、僅錄其吉光片羽者、七古如「蕎麥歌云、荏城人世極樂國、口腹何求不可得、時新魚菜尙奢靡、燕席爭供如奉敕、昇平士女不知愁、食魚方丈擬公侯、信山蕎麥無物敵、相魚駿茄遜百籌、七律如「新潟云、八千八水歸新潟、七十四橋

近日都に出で、始めて、詩佛の席間に相ひ遇ふ、風貌偉然として、詩筆最も高し、佳句に云ふ「心の冷なるは句中水を説くに因る、脚の勞するは夢裡に山に登るが爲なり」「一生の好事皆兒戲、數卷の吟詩半は酒媒」「尋常鶯は囀ず朝暎の外、一半花は開く夜雨の中」「別後故人頻りに夢に入り、春來りて、燕子已に家に歸る」と、五言は秋日に云ふ「雲氣危石に生じ、風聲急瀧に聚る」「山中に云ふ「樹は冷かなり新秋雨、峯は高し太古の雲」の如き、皆な趣あり、其の社を晚晴吟社と號す、晚晴とは如亭の信中に書を讀む堂の名なり。

如亭の晚晴堂集、詩は精細を極む、美收むるに勝へず、僅に其の吉光片羽の者を録す、七古、蕎麥の歌に云ふ、「荏城は人世の極樂國、口腹何を求めてか得べからざらん、時新の魚菜は奢靡を尙ふ、燕席争ひ供して敷を奉ずるが如し、昇平の士女愁を知らず、食前方丈公侯に擬す、信山の蕎麥は物の敵する無く、相魚駿茄も百籌を遜る」の如き七律、新潟に云ふ「八千八水は新潟に歸し、七十四橋は六街を成す、海口波平にして淡船を容れ、沙頭路軟にして遊鞋を受く、花類柳戀人をし

成六街、海口波平容、湊船、沙頭路、軟受、遊鞋、
花顏柳態、令人豔、魚膾蟹螯、盡開酒懷、莫道三
年留一笑、此間何恨、骨長埋、七絕如春晝云、
風微日暖、懶遊絲、初覺午園晴、景奇、花影重
重無寸地、多於昨夜月明時、夏日雜題云、雲
峰半日不曾移、檐外無風柳線垂、閑住晚涼
天更熱、一邊斜照在疎籬、斜陽光裡響輕雷、
潑墨油雲竟不開、地上松筠陰忽失、急風和
雨一時來、廢園云、草合幽蹊絕、往還空看花
石作孱顏、千金費盡人何在、亦是人間萬歲
山、訪金生云、遠訪山家、偶獨來、枯藤穿破曉
雲堆、怪來童子相迎早、定是燈花昨夜開、皆
絕塵之作也、其他警句云、蝸涎現篆、朝曦壁、
蛛網留珠、夜雨牆、燕子花生猶斂、秋、蒲公英

て豔ならしむ、魚膾蟹螯酒懷を開く、道ふ莫れ三年一
笑を留むと、此間何ぞ恨まん骨の長く埋むを、の如
き、七絶、春晝に「風微に日暖に遊絲懶し、初めて覺ゆ
午園晴景の奇なるを、花影重々す絲地無し、昨夜月明
の時よりも多し、夏日の雜題に云ふ「雲峰半日曾て移
らず、檐外風なくして柳線垂る、晚涼を閑住して天更
に熱す、一邊の斜照は疎籬に在り」斜陽光裡輕雷響く、
潑墨の油雲竟に開かず、地上の松筠は陰忽ち失す、急
風雨に和して一時に來る」廢園に云ふ「草合して幽蹊
往還を絶つ、空く看る花石の孱顏を作すを、千金費し
盡す、人何にか在る、亦た是れ人間の萬歲山」金生を
訪ふに云ふ「遠く山家を訪ふて偶、獨り來る、枯藤は
穿破し曉雲は堆す、怪來す童子相迎ふるの早きを、定
めて是れ燈花昨夜開く」の如き、皆な絶塵の作なり、
其の他の警句に云ふ「蝸涎は篆を現はす朝曦の壁、蛛
網は珠を留む夜雨の牆」燕子花生じて猶ほ秋を斂む
蒲公英は老いて始めて穂を撃く、「懶は是れ猫なるか
な長く睡を愛し、僧よりも拙なり居の貧に慣る、「風
あり雪あり夜還た夜、柳なく梅なく春豈に春ならん
や、」雲は老樹多き邊に於て宿し、人は清溪淺處に向つ

老始擊毬、嬾是猫哉、長愛睡、拙於僧矣、慣居貧、有風有雪、夜還夜、無柳無梅、春豈春、雲於老樹多邊宿、人向清溪淺處行、又得意詩從失意來、七字亦妙。

余東歸後、伊勢人有訛傳余死者、至差書相問、因口號二絕云、拋却浮名好是閒、只消盃酒洗愁顏、人間今尙爾遊戲、未許端明歸道山、歷盡畏途心鏤磨、對人不說奈何、往逢陰吏猶知早、三百瓮齏祿料多。

人或謂余曰、陸秀夫當祥興亂離之日、負幼主播越海濱、猶日書大學章句以勸講、近迂而愚矣、方今明七子之徒、棄甲崩角、餘喘無幾、而老生宿儒、猶有抱濟南詩選、絕句解以教子弟者、得無非詩中陸秀夫乎、余曰、然、唯

て行く」と、又た「得意の詩は失意より来る」の七字も亦た妙なり。

余、東歸の後、伊勢の人、余の死を訛傳する者あり、書を差して相ひ問ふに至る、因て二絶を口號して云ふ、
「浮名を拋却して好し是れ閒なり、只だ盃酒を消ひて愁顔を洗ふ、人間今尙ほ爾く遊戯す、未だ許さず端明道山に歸るを」
「畏途を歴盡して心鏤磨す、人に對して説かず窮を奈何せん」と、往いて陰吏に逢ふ猶ほ早きを知る、三百瓮齏祿料多し」と。

人或は余に謂ふて曰く、陸秀夫、祥興亂離の日に當りて、幼主を負ふて海濱に播越し、猶ほ日に大學章句を書して以て勸講せり、迂にして愚なるに近し、方今明の七子の徒は、甲を棄て角を崩し、餘喘幾もなし、而るに老生宿儒は、猶ほ濟南詩選、絶句解を抱きて以て子弟に教ゆる者有り、詩中の陸秀夫に非ざるなきを得んやと、余曰く、然り、唯だ秀夫は迂と雖も、猶ほ

秀夫雖迂、猶知奉正統、七子非僞僭乎、吾恐諸老先生不能爲陸秀夫、而爲莽大夫也、其人大稱善。

世之稱唐明者、取材有限、規模已定、譬如棟梁榑榘畢備、然後營宮室、雖拙工、結構原自不難、至宋元、則不然、譬如造凌雲之臺、架空構虛、出人意表、精巧自非輪般、安能得措手、宜矣僞唐詩之多、而眞宋詩之少也。

均之僞也、唯作僞唐詩者、刻鵠類、鴛其言雖笨、猶且不失君子體統、宋詩失真、則畫虎類狗、其言庸俗淺陋、與誹歌諺謠又何擇焉、竟使耳食者謂宋元諸詩率皆如此、而併薄之也、乃嚶然自稱宋詩、妄不亦甚乎、其病坐不才無識而已、故學宋詩、必須權衡、唯有才識

正統を奉ずるを知る、七子は僞僭に非ずや、吾れ恐らくは諸老先生の陸秀夫たる能はずして、而して莽の大夫たらんことを、其の人大に善と稱せり。

世の唐明を稱する者は、材を取ること限りあり、規模已に定る、譬へば棟梁榑榘畢備りて、然る後に宮室を營するが如し、拙工と雖も結構原と自ら難からず、宋元に至りては則ち然らず、譬へば凌雲の臺を造るが如し、空に架し虛に構へ、人の意表に出づ、精巧、輪般に非ざるよりは、安んぞ能く手を措くこと得んや、宜なり僞唐詩の多くして、眞宋詩の少きことや。

均しく之れ僞なり、唯だ僞唐詩を作る者は、鵠を刻して鴛に類す、其の言は笨と雖も、猶ほ且は君子の體統を失はず、宋詩、眞を失すれば則ち虎を畫きて狗に類す、其の言は庸俗淺陋にして、誹歌諺謠と又た何ぞ擇ばん、竟に耳食者をして、宋元の諸詩は率ね皆な此の如しと謂ひて、併せて之を薄んぜしむるなり、乃ち嚶然として自ら宋詩と稱す、妄も亦た甚だしからずや、其の病は不才無識に坐するのみ、故に宋詩を學ば

可以揣度不然、則鄙俚公行、幾亡大雅、不如作僞唐詩之爲猶愈也。

六如禪師詩名籠罩一世、人以鉢孟中陸務觀稱之、余誦其詩、景仰非一日、或傳師爲人矜情作態、見便可憎、余不欲觀面、恐回慕悅之心也、庚申入京、皆川淇園先生勸余往見、時師避疾在一條里宅、因一造之、門下以病見辭、至今以不見爲幸矣。

余十年以前、作詩開口便落婉麗、絕不能作硬語、嘗有畫簾半捲讀西廂之句、爲人所誦、岡伯和譏爲女郎詩、爾後欲矯其弊、枕藉韓蘇方且有年、始得脫窠臼、余之有今日、實因伯和之激也、伯和喜余竹枝、自爲磨寫、且摘疵累一二以見寄、亦可謂知音矣、今歸九原、

必ず權衡を須ふ、唯だ、才識あるものは以て揣度すべし、然らずんば、則ち鄙俚公行し、幾んど大雅を亡ふ、僞唐詩を作るの猶ほ愈ると爲すに如かざるなり。

六如禪師は、詩名、一世を籠罩す、人は鉢孟中の陸務觀を以て之を稱す、余、其の詩を誦し、景仰すること一日に非ず、或は傳ふ、師、人と爲り矜情態を作し、見れば便ち憎むべしと、余、面を覲るを欲せず、慕悅の心を回さんことを恐るればなり、庚申に京に入る、皆川淇園先生、余に勸めて往きて見へしむ、時に師、疾を避けて一條の里の宅に在り、因りて一たび之に造る、門下、病を以て辭せらる、今に至るまで見ざりしを以て幸と爲せり。

余、十年以前に詩を作るに、口を開けば便ち、婉麗に落ち、絶えて硬語を作す能はず、嘗て「畫簾半は捲いて西廂を讀む」の句あり、人に誦せらる、岡伯和譏りて女郎の詩と爲す、爾後其の弊を矯めんと欲し、韓蘇に枕藉すること方且きに、年あり、始めて窠臼を脱するを得たり、余の今日有るは、實に伯和の激するに因るなり、伯和、余の竹枝を喜び、自ら爲めに磨寫し、且つ疵累一二を摘して以て寄せらる、亦た知音と謂ふ可し、今、九原に歸る、一たび之を懷ふ毎に、悽然とし

每一憶之、悽然淚下。

余深川竹枝實出、一時遊戲、初無意傳之、奈流播已遠、馴不可追、近日輕薄子弟、傲擊余作、動曰、某竹枝、某竹枝、猥褻鄙陋、無所不至、何其醜也、亦自悔爲之商榷矣。

獨愛島梅外兩國竹枝云、酒樓高下艇西東、無數涼棚架水中、清景最宜無月夜、無樓無艇不燈籠、千丈照波煙火紅、宛如佛力現神通、寶鈴八萬放光彩、塔影一時湧水中、茶店燈光五六點、酒樓簾影二三人、納涼舟盡漁舟在、潮落月昏看跳鱗。

余在伊勢時、忽有投刺者、曰、江戸詩人某、余竊意海內雖廣、作者屈指、不過數人、是何等人而爲此衝撞、旣而相見、乃舊識辻崧宇山

て涙下る。

余の深川竹枝は、實に一時の遊戲に出づ、初めより之を傳ふるに意なし、奈せん流播已に遠く、馴も追ふ可からず、近日、輕薄の子弟、余の作に傲擊し、動もすれば曰く、某の竹枝、某の竹枝と、猥褻鄙陋、至らざる所なし、何ぞ其れ醜たるや、亦た自ら之が商榷たるを悔ゆ。

獨、島梅外の兩國の竹枝を愛す、云ふ、酒樓は高下艇は西東、無數の涼棚水中に架す、清景最も宜し無月の夜、樓として艇として燈籠ならざる無きは無し、千丈波を照らして煙火紅なり、宛も佛力の神通を現はすが如し、寶鈴八萬、光彩を放ち、塔影一時水中に湧く、茶店の燈光五六點、酒樓の簾影二三人、納涼の舟盡きて漁舟在り、潮落ち月昏ふして跳鱗を見る。

余の伊勢に在る時に、忽ち刺を投する者あり、曰く江戸の詩人某と、余竊に意へらく、海内廣しと雖も、作者は指を屈するに數人に過ぎず、是れ何等の人にして而も此の衝撞を爲すと、旣にして相ひ見れば、乃ち

松者也、彼此驟然、山松近就宋詩鈔中特拔、誠齋、校村之梓、其所作亦稍似誠齋、夜歸云、村前夜雨染烏煤、蹣跚纔能取路回、怪底傘檐聲乍斷、不知身入樹間來、風趣如此真不愧詩人之目矣。

伊勢中野素堂、近始邂逅於江戸、戴石屏所謂一片雲間不相識、三千里外却逢君者、見示其近作、聞蟲云、幾種草蟲鳴、素秋、滿庭明月夜方脩、露華一滴應須足、底事啾啾訴不休、秋風云、一夕秋風涼頓生、掃空殘暑稱人情、如何吹到清霜夜、作許無邊蕭瑟聲、皆合作也、素堂名正興。

江湖晚進才子極多、其尤者、吾錄二人焉、一、松則武字乃侯、秋海棠云翠羅衣袖淡紅脣、

舊識の辻終字は山松といふ者なり、彼此驟然たり、山松近ごろ宋詩鈔中に就き、特に誠齋を抜き校して之を梓に付す、其の作る所も、亦た稍誠齋に似たり、夜歸に云ふ「村前の夜雨は烏煤を染め、蹣跚に能く路を取りて回る、怪しむ傘檐の聲乍ち斷ゆるを、知らず身は樹間に入り來るを」と風趣此の如し、真に詩人の目に愧ぢず。

伊勢の中野素堂、近ごろ始めて江戸に邂逅す、戴石屏の謂はゆる「一片の雲間相ひ識らず、三千里外、卻て君に逢ふ」といふ者なり、其の近作を示さる、蟲を聞くに云ふ「幾種の草蟲、素秋に鳴き、滿庭の明月、夜方に脩し、露華一滴應に須らく足るべし、底事ぞ啾々として訴へて休まざる」秋風に云ふ「一夕秋風涼頓に生ず、殘暑を掃空して人情に稱ふ、如何んぞ吹いて清霜の夜に到りて、許の無邊蕭瑟の聲を作す」と、皆な合作なり、素堂、名は正興。

江湖に、晚進の才子極めて多し、其の尤なる者、吾れ二人を録す、一は松則武、字は公侯、秋海棠に云ふ、翠羅の衣袖淡紅の脣、自ら嬌妝を試む八月の春、石竹は

自試嬌妝八月春、石竹後芳何得比、木蓮雖
 豔恐非倫、煙中腸斷秋寒夕、露下頭垂雨冷
 晨、幽姿生怕西風暴、牕陰相倚護貞身、一宮
 澤邦達字上侯、銚子二絶云、滿江明月滿江
 風、漁唱商歌西復東、別有遊人趁涼去、絃聲
 近在畫船中、危樓當面曉暎紅、宿酒醒時坐
 受風、知否海天奇絶處、征帆影落蘊金中、

上侯、余未識面、其在總中書懷云、只追風月
 欲狂顛、自笑詩僂又酒僂、不用相逢問名姓、
 江湖社裡小無絃、河米庵偶出此詩、見示、讀
 之笑倒、乃寄與云、錦城歌吹在何邊、夜雨聞
 知已七年、今日風情休見擬、江湖非復舊無
 絃。

米庵書名傾動一時、索字者雜然麝至、殆無

芳に後る何ぞ比するを得ん、木蓮は豔と雖も恐らく
 は倫に非ず、煙中腸は斷の秋寒の夕、露下頭は垂る
 雨冷の晨、幽姿生怕す西風の暴なるを、牕陰相倚て貞
 身を護すと、一は宮澤邦達字は上侯、銚子の二絶
 に云ふ「滿江の明月滿江の風、漁唱商歌西復た東、
 別に遊人の涼を趁ふて去る有り、絃聲は近く畫船の
 中に在り」危樓面に當りて曉暎紅なり、宿酒醒る時坐
 して風を受く、知るや否や海天奇絶の處、征帆影は落
 つ蘊金の中」と。

上侯は、余未だ面を識らず、其の總中に在る書懷に云
 ふ「只だ風月を追ふて狂顛せんと欲す、自から笑ふ詩
 僂又た酒僂、川ひす相ひ逢ふて名姓を問ふを、江湖社
 裡の小無絃」と、河米庵、偶々此の詩を出して示さる、
 之を讀んで笑倒す、乃ち寄與して云ふ「錦城の歌吹何
 れの邊にか在る、夜雨聞きて知る已に七年、今日風情
 擬せらるゝを休めよ、江湖、復た舊無絃に非ず」と。

米庵の書名、一時を傾動す、字を索る者は雜然として、

虛日猶能撥忙作詩、詩日清警、駸駸欲度、驕
 驕前矣、誦其病中二律云、病窓亂閃一孤燈、
 振樹狂風勢似崩、電矢射檐光穢磧、雷車碾
 屋響、輪轆痛侵頭、腦神將死、羸到形骸氣不
 騰、過後只聞疎滴落、清涼夜色五更澄、病臥
 柴荆半月過、逢晴自覺體微和、爲盟久廢緣
 花盡、蛙市比開知水多、強欲書詩腕生鬼、悶
 來繙帙睡成魔、蒲觴艾粽未須進、明日端陽
 當奈何、其遊崎嶇所得詩曰、西征小藥未
 草。

寬齋先生壬戌歲重赴越中、時患臂痛、乞暇
 浴南山、有南山紀遊一卷、其中窮婦歎七古、
 悲詞痛語、令讀者動色、叙云、路過小羽村、九
 月十二日、神通岸崩數百步、壞農民家、有婦

隱至し、殆ど虛日なし、猶ほ能く忙を撥して詩を作る、
 詩は日に清警にして、駸々として驕驕の面を度らんと
 欲す、其の病中の二律を誦す、云ふ「病窓亂閃す一孤
 燈、樹を振ふの狂風は勢ひ崩るゝに似たり、電矢檐を
 射て光穢磧、雷車屋を碾りて響、輪轆痛、頭腦を侵し
 て神將に死せんとす、羸形骸に到りて氣騰らず、過後
 只、聞く疎滴の落つるを、清涼の夜色五更澄む、」病
 んで柴荆に臥して半月過ぎ、晴に逢ふて自から覺ゆ
 體微しく和らぐを、爲盟久しく廢するは花の盡くる
 に縁る、蛙市比、ろ開くは水の多きを知る、強ひて詩
 を書せんと欲すれば腕に鬼を生ず、悶し來りて帙を
 繙けば睡魔を成す、蒲觴艾粽未だ進むを須ひず、明日
 端陽當に奈何すべき」と、其の崎嶇に遊ぶや、得る所
 の詩を西征小藥と曰ふ、未だ草を脱せずと。

寬齋先生、壬戌の歲に重ねて越中に赴く、時に臂痛を
 患ひ暇を乞ふて南山に浴す、南山紀遊一卷あり、其の
 中の窮婦歎の七古は、悲詞痛語、讀む者をして色を動
 かさしむ、叙に云ふ、路に小羽村を過ぐ、九月十二日に、
 神通岸崩るゝこと數百步、農民の家を壞る、婦人の泣
 いて訴ふる者あり、其の言凄惋にして聽くに忍びず、

人泣訴者其言凄惋不忍聽因紀其實詩云
 神通川頭岸崩邊響及平地陷良田坵勢橫
 入民人宅屋傾壁壞殆欲顛門有農婦抱子
 哭自陳夫婿本薄福山田贏餘菜與蔬不滿
 父子六箇腹前年水旱田荒蕪歲終猶有未
 輸租計盡假貸買牛犢鬻鹽遠度飛山途飛
 山石路二百里大如踏又小如齒不但人疲
 牛亦勞官租未輸牛先死官租假貸負一身
 怨訴號天無處陳其與投淵寧自買爲奴離
 家已幾春妾爲孤獨守空室兒子在背女邊
 膝畫爲人俯夜群纒光陰空度一日日何計
 天變又歸我一夜觀此顛覆禍兒號女泣纏
 妾身嗟是何因又何果吾婿平生不作惡妾
 亦艱苦助耕穫身死何厭奈女兒語畢雙淚

因て其の實を紀すと、詩に云ふ「神通川頭岸崩る邊響は平地に及んで良田を陷いる、坵聲は横に入る民人の宅屋傾壁壞れて殆んど顛らんと欲す、門に農婦あり子を抱いて哭す、自から陳す夫婿は本と薄福、山田の贏餘は菜と蔬と、父子六箇の腹に滿たず、前年水旱に田は荒蕪し、歲終りて猶ほ未だ輸せざるの租あり、計盡きて假貸して牛犢を買ひ、鹽を鬻ぎて遠く度る飛山の途、飛山の石路二百里、大は刃を踏むが如く小は齒の如し、但、人の疲るゝのみならず牛も亦た勞す、官租未だ輸せざるに牛先づ死し、官租假貸一身に負ふ、怨訴して天に號ぶも陳するに處なし、其の淵に投ぜんよりは寧ろ自ら賣らん、奴と爲りて家を離るゝ已に幾春ぞ、妾は孤獨と爲りて空室を守る、兒子は背に在り女は膝を邊る、晝は人の傭と爲り夜は、繩を群む、光陰空しく度る一日日、何ぞ計らん天變又た我に歸し、一夜此の顛覆の禍に觀んとは、兒は號び女は泣いて妾が身を纏ふ、嗟、是れ何の因ぞ又た何の果ぞ、吾が婿は平生惡を作さず、妾も亦た艱苦して耕穫を助く、身死するはず何ぞ厭はん女兒を奈せん」と、語畢りて隻淚絲の絡ふが如し、一行聽く者皆な傷

如絲絡、一行聽者皆傷愁、爲作喻辭、慰沉憂、悠悠蒼天不爲爾、明明皇天爾勿尤、天高人語不易響、中有冥吏不忠僕、所恃皇天好生、豈無雨露濕枯壤、未幾詩達其君、詰問官吏、遽周恤之、爾後封內無告之民、及孝子力田、皆得聞以賜錢物、實由先生之力也、詩裨風教、蓋乃如此、世之以詩爲弄具者、讀之能無警乎。

周伯弼三體詩、擷唐詩之英、極爲粹然、比之濟南詩選、更覺萬萬、唯坊本訛雜、坐之被廢、江湖社校本現在、他日將梓行、世伯弼宋嘉定進士、有端平集十二卷、李彛又選而序之、曰端平詩雋、宋詩存亦已收、之儼然爲一名家、而徠翁與子和書云、周伯弼一無名男子、

愁す、爲に喻辭を作りて沈憂を慰す、悠悠たる蒼天爾が爲にせざるも、明々たる皇天爾尤むる勿れ、天高ふして人語は響き易からず、中に冥吏あり忠僕ならず、恃む所は皇天生々を好む、豈に雨露の枯壤を濕はず無からんや」と、未だ幾くならずして、詩其の君に達す、官吏を詰問して、遽に之を周恤せり、爾後封内無告の民、及び孝子力田、皆な聞ゆるを得て、以て錢物を賜ふ、實に先生の力に由るなり、詩の風教を裨くる蓋乃ち此の如し、世の詩を以て弄具と爲す者は、之を讀んで能く警むる無からんや。

周伯弼の三體詩は、唐詩の英を擷んで、極めて粹然と爲す、之を濟南の詩選に比するに、更に萬々を覺ゆ、唯坊本訛雜之に坐して廢せらる、江湖社の校本現在に在り、他日將に梓して世に行はんとす、伯弼は宋の嘉定の進士にして、端平集十二卷あり、李彛は又た選んで之に序して、端平詩雋と曰ふ、宋詩存にも亦た己に之を收む、儼然として一名家たり、而るに徠翁の子和に與ふる書に云ふ、周伯弼は一の無名男子なりと、何ぞ其れ寃なるや、人は言ふ徠翁は鬼面を假りて以て

何其寃也、人言徠翁假鬼而以嚇人信哉、余近梓端平詩稿以行世、將洗其寃且醒世之嚇死者。

孟遲閨情詩、麝蕪亦是王孫草、莫送春香入客衣、六如云、麝蕪本有當歸之名、今爲王孫眼中草、亦爲有不歸之義、所以不願其香入衣、是解莫爲禁止也、余則以爲莫猶豈無、莫將孤月對猿愁、同法、謂麝蕪亦是王孫草中一種、豈無香入郎衣乎、宜或替我說知當歸之意耳、是憑仗之詞、然後癡情益見、果依師說、則當歸義輕、極爲無味、唯續詩話作、在師寂後、則說出他臆、亦未可知、

錢翬江行花蕊宮詞、幸而傳者也、羅虬比紅兒、胡曾詠史、不幸而傳者也、近人詩集、不幸

人を嚇すと、信なるかな、余近ごろ端平詩稿を梓して世に行ふ、將に其の寃を洗ひ且つ世の嚇死する者を醒さんとす。

孟遲の閨情の詩に「麝蕪亦是王孫草、莫送春香入客衣」と、六如云ふ、麝蕪は本と當歸の名あり、今ま王孫眼中の草と爲れば、亦た不歸の義ありと爲す、其の香の衣に入るを願はざる所以なりと、是れ莫を解して禁止と爲すなり、余は則ち以爲へらく、莫は猶ほ豈に無からんやの如し、「孤月を將て猿愁に對すること莫らんや」と同法なり、謂ふに麝蕪も亦た是れ王孫草中の一種なり、豈に香の郎の衣に入る無らんや、宜く或は我に替りて當歸の意を説知すべきのみと、是れ憑仗の詞にして、然る後に癡情益見はる、果して師の説に依れば、則ち當歸の義輕くして、極めて味なしと爲す、唯だ續詩話の作は師の寂後に在れば、則ち説は他の臆に出づるも亦た未だ知るべからず。

錢翬の江行花蕊の宮詞は、幸にして傳はる者なり、羅虬の比紅兒、胡曾の詠史は、不幸にして傳はる者なり、

而傳者亦多矣。

烏歸德作秋興八首、服子遷與書規之、載在集中、其所論與宋林貞譏鄭少谷、曰時非天寶官非拾遺、徒托于悲哀激越之音、可謂無病而呻者、暗相啗合、可知此老亦有見解。

老杜諡文貞、見張伯雨跋語、人多不知、故表出之。

詩燼曰、古人詩用地名、皆其大且顯者、今考之地志、歷歷可知、此方地名、多不雅馴、近世作家、漫以意變易其字、如使君灘、承華渡、當時猶難的、知其所、何況百年之後、令人疑且惑、不啻禹貢九河哉、余按、誠齋有句云、里名只道新名好、不道新名誤後人。

余詩見屢變、少時例趨時好、奉崇李王、小變

近人の詩集、不幸にして傳はる者亦多し。

烏歸德、秋興八首を作る、服子遷、書を與へて之を規す、載せて集中に在り、其の論ずる所は、宋林貞が鄭少谷を譏りて、時は天寶に非ず、官は拾遺に非ず、徒に悲哀激越の音に托するは、病なくして呻する者と謂ふべしと曰へると、暗に相ひ啗合す、此の老も亦た見解あるを知るべし。

老杜、文貞と諡す、張伯雨の跋語に見ゆ、人多く知らず、故に之を表出す。

詩燼に曰く、古人の詩に地名を用ゆるは、皆な其の大にして且つ顯るゝ者なり、今之を地志に考ふるに、歴々として知る可し、此の方の地名は、多くは雅馴ならず、近世の作家、漫に意を以て其の字を變易す、使者灘、承華渡の如き、當時猶ほ的に其の所を知り難し、何ぞ況んや百年の後をや、人をして疑ひ且つ惑はしむること、曾に禹貢の九河のみならず、余按するに、誠齋句あり云ふ「里名只道新名好しと、道はず新名の後人を誤るを」と。

余、詩見屢變す、少時例して昨好に趨き、李王を奉崇

爲謝茂秦亦皆棄去。既學溫李冬郎年垂三十始窺韓蘇門戶頗有所悟一切謝纖弱者後又獲誠齋集深喜其超脫然方臯相馬不必然相似今日所主在吸諸家之精英而出之未知後來意見果能幾變也董玄宰跋自書云以不自立家故數數遷業如此得在此失亦在此與余詩正相同。

袁子才不喜黃山谷而喜楊誠齋與余天性若有暗合然不特余也喜黃者絕少喜楊者常多蓋黃詩與峭耳苦艱澁楊詩尖新易入心脾故也人但知學黃者墮魔障而不知學楊者亦墮魔障矣不善學之禍楊恐過于黃余常戒子弟莫輕讀誠齋集者爲此故也孟子曰有伊尹之志則可人多不會此意。

す少しく變じて謝茂秦を爲す亦た皆な棄て去る既にして溫李冬郎を學ぶ年三十に垂んとして始めて韓蘇の門戶を窺ひ頗る悟る所あり一切纖弱者を謝す後又た誠齋集を獲て深く其の超脫を喜べり然れども方臯馬を相する必ずしも相ひ似ず今日の主とする所は諸家の精英を吸ふて之を出だすに在り未だ知らず後來意見果して能く幾變するを董玄宰は自書に跋して云ふ自から家を立てざるを以て故に數々業を遷すこと此の如し得も此に在り失も亦た此に在りと余の詩と正に相ひ同じ。

袁子才は黃山谷を喜ばず而して楊誠齋を喜ぶ余の天性と暗合あるが若し然れども特に余のみならず黃を喜ぶ者は絶えて少く楊を喜ぶ者は常に多し蓋黃の詩は奥峭にして耳艱澁を苦しむ楊の詩は尖新にして心脾に入り易きが故なり人は但た黃を學ぶ者は魔障に墮つるを知りて楊を學ぶ者も亦た魔障に墮つるを知らず善く學ばざるの禍は楊は恐らく黃に過ぎん余常に子弟を戒めて輕しく誠齋集を讀む莫らしむるは此が爲めの故なり孟子曰く伊尹の志あらば則ち可なりと人多くは此の意を會せず。

竹風秋九夏、溪月晝三更、自是倒語、雖類奇巧、字法乃爾、六如傲之云、歌吹暖熱冬三伏、雪月清妍晝二更、一倒一順、余所未解。

隨園詩話曰、毛西河詆東坡春江水暖鴨先知云、春江水暖、定該鴨知、鴨不知耶、此言則太鶻突矣、然詩話又曰、東坡凍合、玉樓蹇起、粟光搖、銀海眩生花、銀海玉樓、不過言雪色之白、注蘇者、必以爲道家肩目之稱、則當下雪時、專飛道士家、不到別人家耶、○突更出西河之上矣、按侯鯖錄載坡詩云云、王荆公曰、道家以兩肩爲玉樓、眼爲銀海、坡曰、惟荆公知之、則坡公實用此典、子方亦何不深考、郭暉遠寄家信、誤封白紙、裴答曰、碧紗窓下啓緘封、尺紙從頭徹尾空、應是僊郎懷別恨、

〔竹風秋九夏、溪月晝三更〕は、自らはれ倒語なり、奇巧に類すと雖も、字法は乃ち爾り、六如之に傲ふて云ふ、〔歌吹暖熱冬三伏、雪月清妍晝二更〕と、一倒一順、余の未だ解せざる所なり。

隨園詩話に曰く、毛西河、東坡の「春江水暖にして鴨先づ知る」を詆りて「春江水暖なり、定めて鴨は知りて、鶻は知らざる、諷きかと、此の言は則ち太だ鶻突なり、然れども詩話に又た曰く、東坡の「凍は玉樓に合して寒、粟を起し、光は銀海に搖ひて眩、花を生ず」と、銀海玉樓は、雪色の白きを言ふに過ぎず、蘇を注する者は必ず以て道家肩目の稱と爲す、則ち雪を下すの時に當りて、專ばら道士の家に飛んで、別人の家に到らざるかと、鶻突は、更に西河の上に出づ、按ずるに侯鯖錄に、坡詩を載せて云々と、王荆公曰く、道家は兩肩を以て玉樓と爲し、眼を銀海と爲すと、坡曰く、惟だ荆公之を知ると、則ち坡公は實に此の典を用ゆ、子方亦た何ぞ深く考へざる。

郭暉遠、家信を寄するに、誤りて白紙を封ず、裴答へて曰く、碧紗窓下に緘封を啓く、尺紙從頭徹尾空し、應に是れ僊郎の別恨を懐くべし、人を憶ふは全く不

憶人全在不言中、此吳仁叔妻詩、江西太守、將伐古樹、有客題云、遙知此去棟梁才、無復清陰護綠苔、只恐月明秋夜冷、誤他千歲鶴歸來、此維琳禪師詩、而子才皆以爲今話、可謂食三日祭肉矣。

董九如君名蹟、風流一時爲畫名所掩、余始相見、特蒙推挹、無幾、余西遊、君亦捐館舍、至今感其言、寬齋先生嘗贈君以四絕句云、曾中山嶽寫天真、紙筆春圍坐、晚煙一種清香、茶鼎熱、梅花落處汲幽泉、高懷不逐世間塵、閑炷爐沉自寫真、一葉扁舟一甕酒、蘆花洲裡一漁人、老來興味總空濛、寄在水煙山靄中、翠鳥紅花如錦筆、附他年少弄春風、一卷輞川圖始成、三春謝客亦幽情、傳家好做兒

言の中に在り」と、此れ吳仁叔の妻の詩なり、江西の太守將に古樹を伐らんとす、客あり題して云ふ、遙に知る此去つて棟梁の才、復た清陰の綠苔を護する無し、只だ恐る月明の秋夜冷かなるに、他を誤りて千歲鶴歸り來らん」と、此は維琳禪師の詩なり、然るに子才は皆な以て今話と爲す、三日の祭肉を食ふと謂ふべし。

董九如君名蹟、風流一時、畫名に掩はる、余始めて相見るとき、特に推挹を蒙る、幾も無くして余は西遊し、君も亦た館舍を捐つ、今に至るまで其の言に感ず、寬齋先生嘗て君に贈るに、四絶句を以てす、云ふ、
 「胸中の山嶽、天真を寫す、筆を舐めて春圍に坐す、一種の清香、茶鼎熱す、梅花落つる處に幽泉を汲む」高懷、世間の塵を逐はず、閑に爐沉を炷して自から眞を寫す、一葉の扁舟一甕の酒、蘆花洲裡の一漁人」
 「老來興味は總て空濛、寄せて、水煙山靄の中に在り、翠鳥紅花錦の如き筆、他の年少に附して春風を弄す」
 「一卷の輞川圖始めて成る、三春、客を謝するも亦た幽情、家に傳へて好し兒孫の寶と做さん、比せず他人の滿羸を遺す」と、皆な其の實を紀するなり、君

孫實不比他人遺滿贏、皆紀其實也、可作君小傳讀。

牧澹齋君諱成傑、余辱知遇有年矣、君自辛酉出尹駿府、有有脚陽春之譽、今歲丙寅、超遷京職、余獻詩云、白社君收丁卯集、青雲我笑甲辰雌、以余與君同庚也、君於書尤道、所建三保碑、出其手迹、詩則嘗以余備顧問。

竹所君諱成文、澹齋君同族、詩情蘊藉、在公之暇、屢開文讌、與其社者如谷麓、谷膝、祭堂、源波響、野醉石、山蕉窓、諸人、俱爲一時之選、近因祭堂致意、引余相見、殆如平生驩、讀其夏日雜咏三十首、清脆可喜、今錄一首云、家在小橋深巷東、柴門常閉鎖幽叢、池頭曉過新荷雨、檐角畫生疎竹風、蝶認瓶花來簷上、

の小傳と作して讀むべし。

牧澹齋君、諱は成傑、余は、知遇を辱ふすること年あり、君は辛酉より出でて駿府に尹たり、有脚陽春の譽あり、今歲丙寅に京職に超遷す、余、詩を獻じて云ふ「白社君は收む丁卯集、青雲我は笑ふ甲辰雌」と、余は君と同庚なるを以てなり、君は書に於て尤も道なり、建つる所の三保の碑は、其の手跡に出づ、詩は則ち嘗て余を以て顧問に備ふ。

竹所君、諱は成文、澹齋君の同族なり、詩情蘊藉、在公の暇には屢文讌を開く、其の社に與る者、谷麓、谷膝、祭堂、源波響、野醉石、山蕉窓の諸人の如き、俱に一時の選たり、近ごろ祭堂に因りて意を致し、余を引きて相ひ見る、殆んど平生の驩の如し、其の夏日雜咏三十首を讀むに、清脆喜ぶ可し、今、一首を録す、云ふ、家は小橋深巷の東に在り、柴門常に閉ちて幽叢に鎖す、池頭曉に過ぐ新荷の雨、檐角畫は生ず疎竹の風、蝶は瓶花を認めて簷上に来り、蜂は研水を窺ふて窓中に入る、端なく睡起して茶の熟するに逢ふ、書課重ねて收む

蜂窺。研水入窓中、無端睡起逢茶熟、書課重收半日功。

波響名廣年、松前公族、尤工畫、詩則學于六如、殊有淵源、題畫云、山抱清溪、溪抱村、桑麻鷄犬小桃源、滯雲界斷人間路、不許徵租來叩門、聞鵲云、纖月磨鎌夜四更、亂雲堆裡影微明、杜鵑彷彿驚眠過、認得新聲第二聲、醉石名寧恆、才最高、春盡云、雨送殘紅委砌苔、樹頭樹底綠成堆、園丁已獻拳來、厥、穉子能收豆樣梅、園中云、籬角薔薇香一叢、枝頭花褪雨前紅、夏初題目如斯耳、翠樹成瀾日午風、蕉窓名寬、舟行云、蘆荻抽鍼蒲立錐、一齊寸綠退潮時、水鄉閑說鯉魚美、要訪漁郎訂釣期、咏燕云、社雨初晴春已中、烏衣輕颺一

半日功」と。

三〇

波響名は廣年、松前の公族なり、尤も畫に工なり、詩は則ち六如に學ぶ、殊に淵源あり、畫に題するに云ふ「山は清溪を抱ひて、溪は村を抱く、桑麻鷄犬小桃源、滯雲は界斷す人間の路、許さず徵租の來りて門を叩くを」鵲を聞くに云ふ「纖月鎌を磨いて夜四更、亂雲堆裡影微明、杜鵑彷彿眠を驚かして過ぐ、新聲を認め得るは第二聲」と、醉石、名は寧恆、才最も高し、春盡に云ふ「雨は殘紅を送りて砌苔に委す、樹頭樹底綠、堆を成す、園丁は已に獻す拳來の蕨、穉子は能く收む豆樣の梅」と、園中に云ふ「籬角の薔薇店一叢、枝頭花は褪す雨前の紅、夏初の題目は斯の如き耳、翠樹瀾を成す日午の風」と、蕉窓、名は寬、舟行云「蘆荻は鍼を抽き蒲は錐を立つ、一齊の寸綠退潮の時、水郷説くを聞く、鯉魚の美なるを、漁郎を訪ふて釣期を訂せんと要す」と、燕を咏するに云ふ「社雨初めて晴れて春已に中す、烏衣輕く颺る一簾の風、海棠庭院花狼藉、滿口の新泥半は是れ紅」と。

簾風海棠庭院花狼藉滿口新泥半是

博求壽詩此弊今猶不已庸人俗子以是爲孝不知累鴛堆瓦原白不拂侑爵縱令有佳作不過祝嘏浮辭耳余一切卻之然亦有爲不恭者因生一策預作題畫祝詞貴賤者艾皆可應用不得止則倩人作畫自題以貽庶可免責矣近有一老衲來需己壽余不覺絕倒夫四大色身視爲寄寓固無相壽之理何況自圖其壽乎昧者爲事愚乃至是

壽詩猶可恕也又有募哭詩者夫七情中哀重於喜東坡云不言歌則不哭兩者有間可以見己今取其重者求之行路人不通之甚豈欲使人人爲劉豫州乎某家少年死其友相會作哭詩其父泣曰賤息短命不料今日

唯壽詩を求むる此の弊は今猶ほ已まらず庸人俗子は是を以て孝と爲す知らず畫を累し瓦を堆す原と自から侑爵に堪へず縱令佳作あるも祝嘏の浮辭に過ぎず余は一切之を卻く然れども亦た不恭と爲す者あり因て一策を生じ預め題畫の祝詞を作り貴賤者共に皆な應用すべし止むを得ずれば則ち人を倩ひて畫を作らしめ自から題して以て貽る庶くば責を免るべし近ごろ一老衲あり來りて己れが壽を畫じ余は覺えず網倒せり夫れ四大色身視て寄寓と爲す固より相ひ壽するの理なし何ぞ況んや自から其の壽を圖るをや昧者の事を爲す愚は乃ち是に至る

壽詩は猶ほ恕すべきなり又た哭詩を募る者あり夫れ七情の中哀は喜より重し東坡云ふ歌へば則ち哭せずと言はずとは兩者の間ある以て見るべきのみ今其の重き者を取り之を行路の人に求む不通の甚だしき豈人々をして劉豫州たらしめんや欲するか某の家少年死せり其の友相會して哭詩を作る其の父泣て曰く賤息短命料らざりき今日諸君

爲諸君嘲具、此言沈痛、可以醒世。

毛聖民直道、夙以鐵筆著、近選今人詩爲集、人詆其越俎、余閱所選、正變具錄、雖小乏鑒裁、一讀亦足以觀各州之風尙矣、有古人探歌謠於民間之遺意、因名曰探風集、蓋選詩者、門戶須寬、摭摭須博、若使宮角不相容、則公道廢矣、余作詩話、猶自愧局狹、自非沉交如聖民、安能得司此選、聖民作詩、世多不知、其寄內一絕云、幽竹留叢在故山、三秋無主護、柴關愁風苦雨知多少、慚愧清陰待我還、殊爲清婉。

菅伯美清成詩、慕白太傅、作宰、默止十五年、頗著風績、禱雨孝婦諸作、古藻淋漓、其事其詩俱足千古、惜篇太長、不能備錄、又極有風

の嘲具とならんとはと、此の言沈痛、以て世を醒す可し。

毛聖民直道、夙に鐵筆を以て著はる、近ごろ今人の詩を選して集と爲す、人、其の越俎を詆る、余、所選を闡するに、正變具に録す、小く鑒裁に乏しと雖も、一讀、亦た以て各州の風尙を觀るに足れり、古人、歌謠を民間に探るの遺意あり、因て名づけて探風集といふ、蓋詩を選ぶ者は、門戶は須らく寬なるべく、摭摭は須らく博なるべし、若し、宮角をして相ひ容れざらしめば、則ち公道廢す、余は、詩話を作る、猶ほ自から局の狹きを愧づ、況や、聖民の如きに非ざるよりは、安くんぞ能く此の選を司るを得んや、聖民の詩を作る、世、多く知らず、其の内に寄する一絶に云ふ「幽竹叢を留めて故山に在り、三秋王なく柴關を護す、愁風苦雨知る多少ぞ、慚愧す清陰の我が還るを待つを」と、殊に清婉と爲す。

菅伯美清成、詩は白太傅を慕ふ、默止に宰と作ること十五年、頗る風績を著す、禱雨孝婦の諸作は、古藻淋漓たり、其の事其の詩俱に千古に足る、惜むらくは、篇太だ長くして備録すること能はず、又た極めて風

情者、如林下春芳不暫駐、一叢紅葉獨情多、
紅芳未褪無香洩、早已今朝摧一枝、詔句、一
往情深語、令人想出自家故事、擬古云、桃花
衫子杏花裙、送歡歸來襖猶溫、曉風鬢髮亂
如雲、亂如雲猶可束、枕上淚不可掬。

松濤女史名璐瑤、字玉聲、爲吾友土井德人
之妻、性嫺雅、好吟咏、德人爲寫數首見寄、僅
錄二首、折菊云、小園折取最繁枝、挿得瓶中
看也宜、癡蝶定知無著處、飛來依舊繞東籬、
冬景云、一徑蕭條霜後天、老筠護綠小橋邊、
寒流水淺二三尺、雙鴨尙依枯荻眠。

余嘗題紅葉仕女圖云、掌書玉殿是前身、香
骨雲衣不惹塵、流水依然紅葉在、外家知己
恐無人、夢有人、謂曰、知己二字不膩、若作鸞

情なる者あり「林下の春芳暫らくも駐らず、一叢の紅
葉獨り情多し」「紅芳未だ褪せず香の洩るゝ無く、早
く已に今朝一枝を摧く」の詔句の如き、一往情深の語
なり、人をして自家の故事を想起せしむ、擬古に云ふ、
「桃花の衫子杏花の裙歡を送りて歸來襖猶ほ温なり、
曉風鬢髮亂れて雲の如し、亂れて雲の如きも猶ほ束
ぬ可し、枕上の涙は掬す可からず」と。

松濤女史、名は璐々字は玉聲、吾が友土井德人の妻
たり、性嫺雅にして、吟咏を好む、德人爲に數首を寫
して寄せらる、僅に二首を録す、菊を折るに云ふ、小
園折取す最繁の枝、瓶中に挿み得て看も亦た宜し、
癡蝶は定めて知る著くる處なきを、飛來舊に依り
て東籬を繞ると、冬景に云ふ、一徑蕭條たり霜後の
天、老筠、綠を護す小橋の邊、寒流水淺し二三尺、雙鴨
は尙ほ枯荻に依りて眠ると。

余嘗て紅葉仕女の圖に題して云ふ、掌書玉殿是れ前
身、香骨雲衣塵を惹かず、流水依然として紅葉在り、
外家の知己恐らくは人なからん」と、夢に人あり謂
つて曰く、知己の二字膩ならず、若し鸞匹に作らば則

匹則佳、余大悅、遂改用之、然亦未見其確、後閱流紅記、韓嫁、佑後有詩云、今日卻成鸞鳳匹、方知紅葉是良媒、的有此來處、豈冥冥中有來通者乎、余奇以屢語人。

燕用雲兜、六如云、蓋雲棟雲梁之類、蕉中以爲當是燕巢、如肩輿稱兜子、按、王謝抵烏衣國歸、王命取雙飛雲軒、至乃烏氈兜子、事見摭遺、原非辭典、二師失之目睫。

五言對仗、極有佳者、天機一到、固不待權鑿而定、僅僅十字精神百出、若通全首、卻欠渾成、如寬齋先生雲、低山失半、林盡水看全、槩堂夜市橋頭月、歸漁柳底燈、詩佛松聲一枕雨、竹影滿窓雲、晚色先侵柳、夕陽猶在花、諸句、是也、頃讀中島潛夫湖中詩、云、浦雲遙斂

ち佳ならんと、余大に悦び遂に改めて之を用ゆ、然れども亦た未だ其の確なるを見ず、後ち流紅記を閲するに韓、佑に嫁するの後ち、詩あり云ふ「今日卻て鸞鳳の匹と成る、方に知る紅葉は是れ良媒」と、的に此の來處あり、豈んど冥々の中に來り通する者あるか、余奇として以て屢人に語る。

燕に雲兜を用ふ、六如云ふ、蓋、雲棟雲梁の類なりと、蕉中には以爲へらく當に是れ燕巢なるべし、肩輿を兜子と稱するが如しと、按するに王謝、烏衣國に抵り、歸るとき、王命じて雙飛雲軒を取らしむ、至れば乃ち烏氈の兜子なりと、事は摭遺に見ゆ、原と辭典に非ず、二師は之を目睫に失す。

五言の對仗、極めて佳なる者あり、天機一到、固より權鑿を待たずして定まる、僅々十字、精神百出す、若し全首を通すれば、卻て渾成を欠く、寬齋先生の「雲低れて、山、半を失ひ、林盡きて、水、全を見る、槩堂の一夜市橋頭の月、歸漁柳底の燈、詩佛の「松聲一枕の雨、竹影滿窓の雲」「晚色、先づ柳を侵し、夕陽、猶ほ花に在り」の諸句の如き是れなり、頃ごろ中島潛夫の湖中の詩を讀むに、云ふ「浦雲遙に雨を斂め、岸葦忽ち波を生ず、」佛刹は林を分ちて出で、市樓は水に臨みて多し、

雨、岸葦忽生波、佛刹分林出、市樓臨水多、島
 嶼千帆雨、漁人一笛風、皆可稱警句、又田家
 云、鳥銜遺穗去、人迹逸牛來、用詩書語成對、
 殊覺老練、惜亦復全首不相稱。

「島嶼千帆の雨、漁人一笛の風」と、皆な警句と稱す可
 し、又た田家に云ふ「鳥は遺穗を銜んで去り、人は逸
 牛を逃ねて來る」は、詩書の語を用ひて對を成す、殊
 に老練を覺ゆ、惜むらくは、亦た復全首相ひ稱はざる
 を。

9
五山堂詩話卷一
終

五山堂詩話卷二

娛 菴 居 士 著

白香山以詩爲說話、楊誠齋以詩爲諧謔、二公才力故當不減少陵、只欲新變代雄、故別出此機杼以取勝耳、後人輕詆二公者、固不知二公之心、其摸倣二公者、亦未免懵懵也、鄙語曰、咬人屎概、不是好狗、今之爲白爲楊者、率皆此類。

日長睡起無情思、閑看兒童捉柳花、浩然齋雅談載誠齋自語、人曰、工夫只在一捉字上、按、白詩云、誰能更學孩童戲、尋逐春風捉柳花、誠齋所本、蓋此雅談所說、卻似可疑。

白香山は、詩を以て說話と爲し、楊誠齋は詩を以て諧謔となす、二公の才力は、故と當に少陵に減せざるべし、只だ新變して雄に代はらんと欲す、故に別に此の機杼を出し以て勝を取るのみ、後人の二公を輕詆する者は固より二公の心を知らず、其の二公を摸倣する者も亦た未だ懵々を免れざるなり、鄙語に曰く、人の屎概を咬むは、是れ好狗ならずと、今の白を爲し楊を爲す者は、率ね皆な此の類なり。

「日長くして睡起情思なし、閑に看る兒童の柳花を捉ふるを」と、浩然齋雅談に載す、誠齋自ら人に語りて曰く、工夫は只だ一の捉の字の上に在りと、按ずるに白詩に云ふ「誰か能く更に孩童の戲を學ぶ、春風を尋逐して柳花を捉ふ」と、誠齋の本づく所なり、蓋、此の雅談の説く所は、卻て疑ふ可きに似たり。

竹所牧君、屢分詩題以課同社、一時咏十梅、
 雙齋未開梅云、香玉枝頭未坼時、蓬蒿叢裡
 自仙姿、多情杜牧吾相似、等候湖州十歲期、
 詩佛梅實云、葉間的皦滿枝垂、無復當時冰
 雪姿、一段酸心誰會得、多情小杜重來時、同
 用一典、而調度各有宜、此詩境之所以爲妙
 也。

丙寅災後、詩佛重構一樓題一聯云、翠柳青
 天、發揮西嶺千秋雪、清風明月、占斷南樓一
 夜涼、上用杜句、下用黃句、真妙對也。

詩雖嫌陳腐、亦無妄自捏造字面之理、韓文
 杜詩、無一字沒來歷、古人鄭重乃如此、後生
 妄以己意種種製作、所謂愚而好自用者、偶
 有人問來處、亦自知其非、乃詭曰、出某集、吾

竹所牧君、屢詩題を分ち以て同社に課す、一時十梅を
 咏す、雙齋の未開梅に云ふ「香玉枝頭未だ坼かざる時、
 蓬蒿叢裡自から仙姿、多情の杜牧吾れ相似たり、等候
 す、湖州十歳の期」と、詩佛の梅實に云ふ「葉間の皦と
 して滿枝垂る、復た當時冰雪の姿なし、一段の酸心誰
 か會得せん、多情の小杜重ねて來る時」と同じく一典
 を用ひて調度各々宜しき有り、此れ詩境の妙たる所
 以なり。

丙寅災後に、詩佛は重ねて一樓を構へ、一聯を題して
 云ふ「翠柳青天、發揮す西嶺千秋の雪、清風明月、占斷
 す南樓一夜の涼」と、上は杜句を用ひ、下は黃句を用
 ふ、眞に妙對なり。

詩は陳腐を嫌ふと雖も、亦た妄りに自から字面を捏
 造するの理なし、韓文杜詩は、一字の來歴没きは無し、
 古人の鄭重なる乃ち此の如し、後生妄りに己が意を
 以て、種々制作す、謂はゆる愚にして自から用ゆるを
 好む者なり、偶々人の來處を問ふあれば、亦た自から
 其の非を知り、乃ち詭りて曰く、某の集に出つと、吾

誰欺欺天乎、且所謂新變者、一換意思、極令斬新之謂、其勝人處、不必在用生字也、猶之善治庖人、其料不過尋常魚肉、一經調劑、便作珍羞殊品、今之詩流烹蛇享客者多矣。

詩用生字者、六如之癖也、其人淹博該通、雖不無鑿據、然亦古人所無、古人以意勝、不以字勝、六如則挾字鬪勝、僅可以悅中人、而不可以牢籠上智也、蓋梁一生讀詩、如閱燈市、覓奇物、故其所著詩話、只算一部骨董簿、殊失詩話之體也。

東坡與魯直書云、凡人文字、當務使平和、至足之餘、溢爲怪奇、蓋出於不得已也、余謂詩亦然、作者能知怪奇出於不得已、則始可與言已。

れ誰をか欺かん天を欺や、且つ謂はゆる新變とは、意思を一換し、極めて斬新ならしむるを之れ謂ふなり、其の人に勝る處は、必ずしも生字を用ふるに在らず、猶ほ之れ善く庖を治むる人は、其の料は尋常の魚肉に過ぎず、一たび調劑を経て、便ち珍羞殊品と作るがごとし、今の詩流は、蛇を烹て客を享する者多し。

詩に生字を用ふるは六如の癖なり、其の人、淹博該通にして、鑿據なきにあらずと雖も、然も亦た古人の無き所なり、古人は意を以て勝ち、字を以て勝たず、六如は則ち字を挾んで勝を鬪はし、僅に以て中人を悦ばしむ可し、而も以て上智を牢籠す可からず、蓋、梁れ一生詩を読む、燈市を閱して奇物を見むるが如し、故に其の著す所の詩話は、只だ一部の骨董簿を算す、殊に詩話の體を失するなり。

東坡の魯直に與ふる書に云ふ、凡そ人の文字は、當さに務めて平和ならしむべし、至足の餘溢れて怪奇と爲る、蓋、已むを得ざるに出づるなりと、余謂へらく詩も亦た然り、作者能く怪奇の已むを得ざるに出づるを知らば、則ち始て與に言ふ可きのみ。

元范德機詩、疊語酬人、翻自苦、好山不敢問、何州、今歲丁卯、余遊奧中、方悟此語之妙、奧雖僻壤、山水秀麗、花木極多、余不欲錯過、擬把筆記遊、一路上問山詰水、奈昇夫渡丁所答、言語訛雜、多致不通、懊惱三四日、投筆不復留意、但衆花之發、無復節信、葛因是有句云、梅桃杏梨、無次第、二十四番一時風、信然、余行適值三月末、人家籬落、桃李繽紛、令人應接不暇、口號云、高低路向亂山東、身落荒陬、疊語中、只有不言桃李妙、吹薰盡日馬頭風、松島平泉諸作、另載在集中。

余於仙臺得三詩人焉、一、松井輔字長民、號梅屋、一、奧田美字厚卿、號橘園、一、入江清字廉卿、號樸庵、屢會飲其家、皆以詩屬、余評定、

元の范德機、詩に「疊語人に酬ひ翻て自から苦しむ、好山敢て何の州ぞと問はず」と、今歲丁卯、余、奧中に遊び、方に此の語の妙なるを悟れり、奧は僻壤と雖も山水秀麗にして、花木極めて多し、余は錯過するを欲せず、筆を把りて遊を紀せんと擬す、一路上に山を問ひ水を詰る、奈んせん昇夫渡丁の答ふる所は、言語訛雜にして、多くは通ぜざるを致す、懊惱すること三四日にして、筆を投じて復た意を留めず、但、衆花の發く、復た節信なし、葛因是句あり、云ふ「梅桃杏梨次第なし、二十四番一時の風」と、信に然り、余の行は適、三月の末に値る、人家の籬落、桃李繽紛として、人をして、應接に暇あらざらしむ、口號して云ふ「高低路は向ふ亂山の東、身は落つ荒陬疊語の中、只、不言桃李の妙あり、吹き薰す盡日馬頭の風」と、松島平泉の諸作は、別に載せん集中に在り。

余、仙臺に於て三詩人を得たり、一は松井輔、字は長民、梅屋と號す、一は奥田美、字は厚卿、橘園と號し、一は入江清、字は廉卿、樸庵と號す、屢、其の家に會飲せり、皆な詩を以て余に評定を屬す、梅屋の春寒に云ふ

梅屋春寒云、寶鴨無烟香篆冷、閉門坐睡不
 看春、軟寒釀雨從渠惡、留住梅花也可人、首
 夏云、綠陰匝地影團圓、褪絮袂衣還未安、嗤
 殺山妻太早計、麥時不道有絃寒、紙鳶云、日
 暮江頭籬幙寂、嘗問乍作止虛聲、橋園晒書
 云、飽受驕陽亂曝時、就中隻卷最相知、無端
 憶得垂髦日、風雪懷經叩塾師、雪意云、寒逼
 肌膚覺粟生、滿園雪意不如清、凍雲黯澹低
 三尺、墜葉無風憂有聲、櫟庵秋日雜題云、風
 搖蒼馬仲蟲鳴、攪得愁人夢數驚、不辨無情
 還有意、都來耳底作秋聲、春曉云、枕上新晴
 也、鶯聲殘夢耶、夏日云、登麥香搖忽過雨、早
 秧綠軟不禁風、又有遠藤庸字伯謹者、春深
 云、春深疎雨淡烟中、新賣桃花小市東、最是

「寶鴨烟なくして香篆冷なり、門を閉ぢて坐睡し春を
 看ず、軟寒は雨を釀す凝が惡に後す、梅花を留住して
 也た人に可なり」と、首夏に云ふ「綠陰匝地影團圓、絮を
 褪して袂衣還て未だ安からず、嗤殺す山妻の太だ早
 なるを、計麥時道はず絃の寒あるを」と、紙鳶に云ふ「日
 暮江頭籬幕寂たり、嘗問乍ち歩虚の聲を作す」と、橋
 園の晒書に云ふ「飽まで驕陽を受け亂曝する時、中
 に就いて隻卷最も相ひ知る、端なく憶ひ得たり垂髦
 の日、風雪經を懷いて塾師を叩きしを」と、雪意に云
 ふ「寒は肌膚に逼りて粟の生するを覺ゆ、滿園の雪意
 清を如んともせず、凍雲黯澹として低き」と三尺、墜
 葉は風なく憂として聲あり」と、櫟庵の秋日の雜題に
 云ふ「風は蒼馬を搖がして蟲鳴に伴ひ、攪し得て愁人
 夢數驚く、辨せず無情還た有意、都て耳底に來り
 て秋聲と作る」と、春曉に云ふ「枕上は新晴なり、鶯聲
 は殘夢なりや」と、夏日に云ふ「登麥香は搖いて忽過
 雨、早秧綠軟にして風に禁へず」と、又た遠藤庸字は
 伯謹といふ者あり、春深に云ふ「春は深し、疎雨淡烟
 の中、新に桃花を賣る小市の東、最も是れ清明の好時
 節、青錢換へ得たり數枝の紅」と。

清明好時節、青錢換得數枝紅。

詩窮而後工、亦卽孟子所謂先苦其心志者、我輩平生得力於窮一字不少、世間執袴子作詩、廣購諸集、無有不備、曾不半年、東之高閣、通習皆然、近日脫此窠者、特烏梅外一人、始終不變、詩亦益工、然烏初作、都不甚佳、一旦落魄客遊、與中歸都之後、方始不凡、益信古人之言、果不我欺也。

梅外著作甚富、其歲暮縱筆七古、灑灑千言、語涉譏刺、故不抄錄、最工七絕、春日云、雨餘輕暖凭欄坐、處處柳梢新綠回、只恨梅花風數尺、樓高不送落葩來、夜景云、星照中流燦有光、暗潮未退霽前塘、漁舟去遠櫓痕定、又現垂楊影一行、村居秋霖云、濁流汨汨漲溪

詩は窮して後に工なり、亦に即ち孟子の謂はゆる、先づ其の心志を苦しましむる者なり、我が輩平生、力を窮の一字に得ること少からず、世間執袴子の詩を作るや、廣く諸集を購ひ備らざる有るなし、曾ち半年ならずして之を高閣に束ぬ、通習皆な、然り、近日此の窠を脱する者は、特に烏梅外一人のみ、始終變ぜず、詩も亦た益々工なり、然れども烏の初作は都て甚だ佳ならず、一旦落魄して與中に客遊し、都に歸るの後方に始めて凡ならず、益、古人の言の果して我を欺かざるを信するなり。

梅外、著作甚だ富む、其の歲暮縱筆の七古は、灑々千言にして、語は譏刺に涉る、故に抄錄せず、最も七絶に工なり、春日に云ふ「雨餘の輕暖欄に凭りて坐す、處々の柳梢新綠回る、只恨む梅花の風數尺、樓高ふして落葩を送り來らず」と、夜景に云ふ「星は中流を照らして燦として光あり、暗潮未だ退かず前塘を灑す、漁舟去ること遠くして櫓痕定る、又た現す垂楊の影一行」と、村居の秋霖に云ふ「濁流は汨々として溪隈に漲り、雲密にして黃昏猶ほ未だ開かず、人聲は時に蘆花の裡よりす、知る是れ警船の雨を趁ふて來ると」

隈雲密黄昏猶未開、人聲時自蘆花裡、知是
 罾船趁雨來、夢後云、輕寒脈脈襲春衣、紙帳
 雪清梅一圓、夢中得句忘還好、免被人間說
 是非、咏燈云、簾間分影過三更、相伴書窓夜
 雨情、半生文字無人見、只有孤燈照得明。

如亭以去冬歸自信中、留都數月、將復西赴
 京畿、時余亦有遊奧之行、見別云、東西兩路
 欲分時、共訂後來相會期、若較風霜多少苦
 輸贏自在、一囊詩、余歸都後、聞如亭在伊勢、
 寄示云、風雪空添幾白鬚、奚囊爭得鬪贏輸、
 歸來詩本全然盡、君肯分多貸我無。

如亭題木母寺云、隔水香羅雜沓過、醒人來
 哭醉人歌、黄昏一片蘆蕪雨、偏傍王孫墓上
 多、絶類晚唐名家。

と夢後に云ふ「輕寒脈々として春衣を襲ふ、紙帳雪は
 清し梅一圓、夢中に句を得て忘るゝも還た好し、人間
 に是非を説かるゝを免る」と、燈を咏するに云ふ「簾
 間影を分ちて三更を過ぐ、相ひ伴ふ書窓夜雨の情、
 半生の文字人の見る無し、只孤燈の照し得て明かな
 るあり」と。

如亭は去冬を以て信中より歸り、都に留ること數月
 にして、將に復た西京畿に赴かんとす、時に余も亦た
 遊奥の行あり、別れらるゝに云ふ、東西の兩路分れん
 と欲する時、共に訂す後來相ひ會する期を、若し、風
 霜多少の苦を較せば、輸贏は自から一囊の詩に在
 りと、余の都に歸りし後ち、如亭の伊勢に在るを聞き
 寄示して云ふ「風雪空く添ふ幾白鬚、奚囊争でか贏輸
 を鬪はずを得ん、歸來詩は本と全然盡く、君は肯て多
 きを分ちて我に貸さんや無や」と。

如亭、木母寺に題して云ふ「水を隔つる香羅は雜沓と
 して過ぎ、醒人は來り哭し醉人は歌ふ、黄昏一片蘆蕪
 の雨、偏に王孫墓上に傍ふて多し」と、絶だ晚唐の名
 家に類す。

國府碧字秋水、詩才高邁、絕近誠齋、不幸早亡、如傳永年、則我輩當避路放他出一頭地、也、其遺稿、詩佛梅外、已爲刊刻矣、茲再錄其逸者、令無遺珠之憾、歲暮云、光陰何倏忽、恰似箭離弦、臘剩兩三日、齡過十八年、親衰堪灑淚、弟長欲駢肩、可歎居新換、又遭窮鬼遷、冬曉云、重衾猶怯冷、寒意曉逾加、窓破半無紙、燈殘纔有花、門前人賣炭、厨下婢煎茶、日出方初起、宛如脫殼蝸、午熱云、一掬微風無處尋、不堪苦困臥槐陰、蟬聲卻是殊人意、赤日炎天得意吟、驟雨云、掩盡殘陽不瀉紅、濃雲如墨刷青空、蟬聲不與雨爲地、默在庭槐一霎中、殘暑云、殘熱甚於三伏時、更無涼意與人宜、火雲卻似綠秋色、遮斷西風不許吹、

國府碧字は秋水、詩才が高邁、絶だ誠齋に近し、不幸にして、早く亡す、如し年を永ふせしめば、則ち我輩は當に路を避けて、他に一頭を出だすの地を放すべきなり、其の遺稿は詩佛梅外已に爲めに刊刻せり、茲に再び其の逸する者を録して、遺珠の憾なからしむ、歲暮に云ふ「光陰何ぞ倏忽たる、恰も箭の弦を離るゝに似たり、臘は餘す兩三日、齡は過ぐ十八年、親衰へて涙を灑ぐに堪へたり、弟長じて肩を駢べんと欲す、歎ず可し居の新に換る、又た窮鬼に遷さる」と、冬曉に云ふ「重衾猶ほ冷を怯る、寒意、曉に愈加はる、窓破れて半は紙なく、燈残して纔に花あり、門前に人、炭を賣り、厨下に婢、茶を煎る、日出で、方に初めて起く、宛も殼を脱する蝸の如し」と、午熱に云ふ「一掬の微風尋ぬるに處なく、暑困に堪へずして槐陰に臥す、蟬聲卻是是れ人意に殊なり、赤日炎天に得意に吟す」と、驟雨に云ふ「殘陽を掩盡して紅を瀉さず、濃雲、墨の如く青空に刷す、蟬聲は雨の與めに地を爲さず、默して庭槐一霎の中に在り」と、殘暑に云ふ「殘熱は三伏の時よりも甚だし、更に涼意の人と宜しき無し、火雲は却て秋色を嫌ふに似たり、西風を遮

秋夜云、竹簾紗幬涼有餘、芭蕉先報雨來初、
一燈分付兩般事、妻製袂衣兒讀書、佳句云、
露冷蛩聲咽、月清梧影癯、烟橫迷渡口、燈細
認漁家、卯時先命酒、亥日早開爐、人或斥秋
水詩爲怪爲妄、余謂此其人胸中書太少、於
宋元諸集、不夢見之、故逢此種詩、遽相駭耳、
認駱駝謂馬腫背、寡見之人、往往如此。

津輕書生、工藤元龍名猶八、遠來入昌平學、
性孤介、自比彌衡、詩有明七子氣魄、寬齋先
生時爲員長、憐其慧而有才、獨善遇之、後激
變生事、其侯怒拘下之獄、時先生辭職在矢
倉、聞事出不意、爲致書有司、訴其冤狀、遂得
免、生有出獄口占贈先生一律云、縲紲銜冤
亦一奇、有人濟我義何涯、海濶吞舟初漏網、

五山堂詩話卷二

斷して吐くを許さず」と、秋夜に云ふ「竹簾紗幬涼有餘」
りあり、芭蕉は先づ報す雨の來る初め、一燈分付す
兩般の事、妻は袂衣を製し兒は書を讀む」と佳句に云
ふ「露冷かにして蛩聲咽ひ、月清くして梧影癯す」烟
横はりて渡口に迷ひ、燈細くして漁家を認む「卯時
先づ酒を命じ、亥日早く爐を開く」と、人或は秋水の
詩を斥して怪と爲し妄と爲す、余謂へらく、此れ其の
人の胸中に書太だ少し、宋元の諸集に於て、夢にだも
之を見ず、故に此の種の詩に逢ひて遽に相ひ駭くの
み、駱駝を認めて馬の腫背と謂ふ、寡見の人は、往々
此の如し。

津輕の書生工藤元龍、名は猶八、遠く來りて昌平學に
入る、性孤介にして、自ら彌衡に比す、詩は明の七子
の氣魄あり、寬齋先生時に員長たり、其の慧にして才
あるを憐み、獨り善く之を遇せり、後に激變して事を
生ず、其の侯怒りて拘へて之を獄に下せり、時に先生
は職を辭して矢の倉に在り、事の不意に出づるを
聞き、爲めに書を有司に致して、其の冤狀を訴へ、遂
に免るゝを得たり、生、獄を出で、口占して先生に贈
る一律あり、云ふ「縲紲、冤を銜むも亦た一奇、人あ
り、我を濟ふ義何ぞ涯りあらん、海濶にして吞舟初め
て網に漏れ、林深ふして枯木再び枝を生ず、舊に仍

林深枯木再生枝、仍舊乾坤須獨往、依然山嶽爲誰歎、無那男兒墜風志、瓦全今日愧君知、後居駒籠、落拓以死、嗚呼此寬政已酉事也、至今二十年、人亦罕知者、追錄以存奇士、人有都鄙之分、詩亦有都鄙之分、聞見已廣、琢磨已精、然後下筆、綽有餘裕、自然不與時背者、謂之都詩、管天蠡海、矜矜自大、剿竊敷衍、死守舊套者、謂之鄙詩、人鄙而詩都、可以登於都也、人都而詩鄙、不可以齒於都也、然尙爲當局自効者、一種有傍觀袖手妄詆訶人者、亦太可憎、袁子才答王夢樓書、引山海經曰、山膏如豚、厥性好罵、直是人禽之辨、然則如此等輩、宜屏諸四裔、不與同中國者、沈香亭畔千株石、散與人家作假山、張芸叟

りて乾坤須らく獨往すべくし、依然として山嶽は誰が爲めに歎つ、那んとする無し男兒風志に墜く、瓦全今日君が知を愧つ」と、後ち駒籠に居り、落拓して以て死せり、嗚呼、此れ寬政己酉の事なり、今に至りて二十年、人も亦た知る者罕なり、追録し以て奇士を存す。

人に都鄙の分あり、詩も亦た都鄙の分あり、聞見已に廣く、琢磨已に精しく、然る後に筆を下せば綽として餘裕あり、自然に時と背かざる者、之を都詩と謂ふ、管天蠡海、矜々自大、剿竊敷衍、舊套を死守する者、之を鄙詩と謂ふ、人鄙にして詩の都ならば、以て都に登ぐべきなり、人都にして詩鄙ならば、以て都に齒す可からず、然れども尙ほ當局自から効す者と爲す、一種傍觀袖手して、妄りに人を詆訶する者あり、亦た太だ憎む可し、袁子才の王夢樓に答ふる書に、山海經を引いて曰く、山膏、豚の如く、厥の性は罵を好む、直に是人禽の辨なりと、然らば則ち此等の輩の如きは、宜く諸を四裔に屏けて、與に中國を同じくせざるべき者なり。

「沈香亭畔千株の石、人家に散與して假山と作す」は

句也、誰憐磊磊河中石、曾上君王萬歲山、范石湖句也、二作極相類、皆有黍離之遺意。

木芸亭名雄飛、作黠鼠詩、尤爲尖新、詞曰、群鼠何太惡、來穿北牖中、糝米將耗盡、猖獗本無窮、衆猫怒鬚起、逐捕互競雄、鼠輩忽竄跡、未聞策奇功、寄言老猫子、重責在汝躬、平生甞與肉、恩養非不豐、此時不竭力、爭報主人翁、余時在南部、封寄此詩、寔某年某月某日也。

明妃詩、多出於假托、當時衛霍兵猶在、未必君王棄妾身、嘆邊備之衰也、人生不用如花貌、只把黃金買畫師、刺苞菑之盛也、早知身被丹青誤、但嫁尋常百姓家、喻躁進之悔也、余十五六時、題范蠡圖云、歸去五湖烟水春、

張芸叟の句なり、「誰か憐まん磊々たる河中の石、曾て上る君王の萬歲山」は范石湖の句なり、二作極めて相ひ類す、皆黍離の遺意あり。

木芸亭名は雄飛、黠鼠の詩を作る、尤も尖新たり、詞に曰く「群鼠何ぞ太だ惡しき、來り穿つ北牖の中、糝米は將に耗し盡きんとす、猖獗本と窮りなり、衆猫鬚を怒らして起ち、逐捕互に雄を競ふ、鼠輩忽ち跡を竄す、未だ奇功を策するを聞かず、言を寄す老猫子、重責は汝の躬に在り、平生甞と肉と、恩養豊ならざるに非ず、此の時、力を竭さずんば、争でか主人翁に報せん」と、余時に南部に在り、此の詩を封寄す、寔に某年某月某日なり。

明妃の詩、多くは假托に出づ、當時衛霍兵猶ほ在り、未だ必ずしも君王は妾が身を棄てず、邊備の衰ふるを嘆ずるなり、人生花の如き貌を用ひず、只だ黄金を把て畫師を買ふは、苞菑の盛なるを刺るなり、早く身の丹青に誤らるゝを知らば、但だ尋常百姓の家に嫁せんには、躁進の悔に喩ふなり。

余十五六の時に范蠡の圖に題して云ふ「歸り去る五

扁舟獨伴像花人、破吳第一功掩世、不省巫
臣是後身、自覺唐突、不示人、後讀東坡詩
云、誰將射御教吳兒、長笑申公爲夏姬、卻遣
姑蘇有麋鹿、更憐夫子得西施、議論更進一
層、爲之爽然自失。

又嘗題訪戴圖云、水浸玻璃峰削銀、扁舟凍
殺苦吟身、原來緣愛剗中好、興在溪山不在
人、偶讀元人詩云、月照梅花雪點春、小舟危
坐醉中身、一時爲愛溪山去、本是無心見故
人、立意用韻皆相啗合、所謂閉門造車、出門
同轍者。

譏刺之詩、以諷托不露爲妙、余最愛明虞克
用、題趙松雪畫云、王孫今代玉堂仙、自畫蒼
溪似輞川、如此青山紅樹底、可無十畝種瓜

湖烟水の春、扁舟獨り伴ふ花に像たる人、吳を破る第
一の功は世を掩ふ、省せず巫臣は是れ後身」と、自か
ら唐突を覺え、出して人に示さず、後ち東坡の詩を讀
むに云ふ「誰か射御を將て吳兒に教ゆ、長く笑ふ申公
の夏姬の爲にするを、却て姑蘇をして麋鹿有らしむ、
更に憐む夫子の西施を得るを」と、議論は更に一層を
進む、之が爲めに爽然として自失す。

又、嘗て、訪戴の圖に題して云ふ「水は玻璃を浸して
峰は銀を削る、扁舟凍殺す苦冷の身、原來剗中の好を
愛するに緣り、興は溪山に在りて人に在らず」と、偶
元人の詩を讀むに云ふ「月は梅花を照らし雪は春を
點す、小舟危坐す醉中の身、一時、溪山を愛するが爲
めに去る、本と是れ故人を見るに心なし」と、立意用
韻相ひ合す、謂はゆる門を閉ぢて車を造り、門を出で
て轍を同じうるする者なり。

譏刺の詩は諷托の露れざるを以て妙と爲す、余、最も
愛す、明の虞克用が趙松雪の畫に題して云ふ「王孫今
代玉堂の仙、自ら蒼溪を畫きて輞川に似たり、此の如
き青山紅樹の底、十畝瓜を種うる田無かる可けんや」

田、何言之優游而有味也。

眼前所經之景、一時不及拾收、偶然被人說出、不堪歡喜、余在南部山中、望見炭烟、誤認雲生、後讀原清字公淵者、山村一絕云、燒炭深林三兩處、淡烟和月透溪隈、半生不解山中事、只道輕雲出岫來、眞實況也。

又山中嘗逢霧、偶讀米庵絕句、情景最眞、實獲我心、詩云、行行山色漸迷離、白霧如衝又似馳、收取曉星殘月去、忽成混沌未分時、細細霏衣濕如雨、濛濛遮面重於烟、同行咫尺看還失、只認人聲知後先、鬱盡溪山撲地冥、只聞流水響冷冷、無端乍被輕風撥、現出前峰半角青、旋旋將收有也、無山還滂淡、樹模糊、眞成罨畫將誰比、好箇虎兒清曉圖、心知

と何ぞ言の優游にして味あるや。

眼前經るゝ所の景、一時拾收するに及ばず、偶然人に説き出ださるれば、歡喜に堪へず、余、南部山中に在りて、炭烟を望見し、誤りて、雲の生ずると認む、後ち原清字は公淵といふ者の山村の一絶を讀むに云ふ「炭を燒く深林三兩處、淡烟は月に和して溪隈を透る、半生解せず山中の事を、只だ道ふ輕雲の岫を出でて來る」と、眞に實況なり。

又山中に嘗て霧に逢ふ、偶々米庵の絶句を讀むに、情景最眞實に我が心を獲たり、詩に云ふ「行々山色漸く迷離、白霧は衝くが如く、又た馳するに似たり、曉星殘月を收取し去り、忽ち混沌未分の時と成る」細々衣を霏して濕ふて雨の如し、濛々として面を遮りて、烟よりも重し、同行咫尺看て還た失す、只だ人聲を認めて後先を知る「溪山を鬱盡して撲地に冥し、只、聞く流水の響き冷冷、端なく乍ち輕風に撥せられ、現出す前峰半角の青、旋々として將に收まらんとす有也た無山は還て滂淡樹は模糊、眞成に罨畫誰を將て比せん、好箇虎兒清曉の圖」心を知る濃霧の半晴を作すを、恰

濃霧作牢晴、恰是行人似解醒、比到津頭天
更碧、前山早已掛銅鉦。

寬齋先生、主持風雅、愛才如命、其在門牆者、
如原長卿、田德郎、勝善長、皆少年能詩、德郎
詩情最佳、余亦深喜、後起有人、長卿曉意云、
無復人來消受涼、獨乘清曉步池塘、星河半
落風纔定、占斷荷花自在香、善長苦熱云、午
熱如焚汗似漿、北窓困睡到斜陽、雷聲雨澁
兩三點、不送人間一掬涼、德郎春曉云、曉光
漠漠暗窓紗、料峭輕寒一段加、殘夢無端被
鶯喚、半庭殘月在梅花、晚春云、無數清愁付
枕邊、春痕況又到啼鶯、下簾不忍看花落、睡
過風風雨雨天、先生嘗有詩云、白首耽吟咏、
纔知脫舊習、後輩多作者、皆言未三十。

も是れ行人の醒を解くに似たり、津頭に到る比ろ天
更に碧なり、前山は早く已に銅鉦を掛くと。

寬齋先生、風雅を主持し、才を愛すること命の如し、
其の門牆に在る者は、原長卿、田德郎、勝善長の如き
皆な少年にして詩を能くす、德郎は詩情最も佳なり、
余も亦た深く後起の人あるを喜ぶ、長卿の曉意に云
ふ「復た人の來りて涼を消受する無く、獨り清曉に乗
じて池塘に歩す、星河半は落ちて風纔に定る、占斷す
荷花自在の香と善長の苦熱に云ふ「午熱突くが如く
汗は漿に似たり、此窓に困睡して斜陽に到る、雷聲雨
は澁る雨三點、人間に一掬の涼を送らず」と、德郎の
春曉に云ふ「曉光漠々として窓紗に暗し、料峭の輕寒
一段加はる、殘夢は端なく鶯に喚ばる、半庭の殘月梅
花に在り」と、晚春に云ふ「無數の清愁、枕邊に付す、
春痕況んや又た啼鶯に到る、簾を下して忍びず花の
落つるを見るに、睡過す風々雨々の天」と、先生嘗て詩
あり云ふ「白首吟咏に耽り、纔に舊習を脱するを知る、
後輩に作者多し、皆な言ふ未だ三十ならず」と。

上侯田園雜興云、門逕跡稀苔色加、午槐陰
 密野人家懶鷄寂寞犬貪睡、無復行商來賣
 茶、原生夏日雜題云、午熱熇熇坐甑如、纒休
 揮扇汗流珠、微風莫把鳴蟬罪、縱不渠餐本
 自無、兩詩翻案極佳、原名靜勝、號迪齋、學詩
 於余者。

僧藕益之注佛典、正文之間、嵌填襯字、令意
 義煥發、徂徠解明絕句、蕉中注、唐詩選、皆襲
 此法、余謂此法孟子已有之、其釋蒸民之詩
 曰、故有物必有則、民之秉彝也、故好是懿德、
 卽是先聲。

詩文二途、固相背馳、偏勝獨得、罕有兼者、柳
 子厚論之詳矣、韓詩排纂、柳詩雋逸、亦俱在
 古詩上論之已、歐公孱弱、荆公險幽、迥不及

上侯の田園雜興に云ふ「門逕跡稀にして苔色加ふ、午槐陰密なり野人の家、懶鷄は寂寞犬は睡を貪る、復た行商の來りて茶を賣るなし」と、原生の夏日雜題に云ふ「午熱は熇々として甑に坐するに如たり、纒に揮扇を休めば汗、珠を流がす、微風は鳴蟬を把つて罪すること莫れ、縱ひ渠れ餐せざるも本と自から無し」と、兩詩は翻案極めて佳なり、原名は靜勝、迪齋と號す、詩を余に學ぶ者なり。

僧藕益の佛典を注するや、正文の間に襯字を嵌填し、意義をして煥發せしむ、徂徠の明絕句を解し、蕉中の唐詩選を注する、皆な此の法を襲す、余は謂ふ此の法は孟子已に之れあり、其の蒸民の詩を釋するに曰く、故に物あれば必ず則あり、民の秉彝なり、故に是の懿德を好むと、卽ち是れ先聲なり。

詩文は二途にして、固より相ひ背馳す、偏勝獨得、兼ぬる者あること罕なり、柳子厚、之を論ずること詳なり、韓詩は排纂にして、柳詩は雋逸なり、亦た俱に古詩の上に在りて之を論ずるのみ、歐公は孱弱にして、

其文、唯能兩得而足、相衡者、在宋獨蘇東坡、在明獨王弇州耳、其他則兩者不無軒輊、此方諸賢、亦復如此、著述比興、兼并之難、自古而然。

自來詩文有大家名家之別、余謂如今日大家、多是粗才、名家間有精才、蓋大家專事展張、不屑縝密、務在網羅一時、故成名太速、名家則不然、嘔心鏤骨、揉磨太細、只要自慊、而不喜強聒人、故名不浪傳、昔人云、顯處視月、牖中窺日、此雖論學之語、可以喻大家名家之別也。

余論作文、獨心折於因是、至詩則趨向小異、因是專宗唐詩、大要本金聖歎法、而間有出入者、一日酒間論詩、臺臺生風、余始尙不應、

荆公は險幽なり、適かに其の文に及ばず、唯能く兩ながら得て相ひ衡するに足る者は、宋に在りては獨り蘇東坡、明に在りては獨り王弇州のみ、其の他は則ち兩者、軒輊なくんばならず、此の方の諸賢も亦た復た此の如し、著述比興、兼并の難き、古よりして然り。

自來詩文に大家名家の別あり、余、謂へらく今日の大家の如き、多くは是れ粗才なり、名家は間、精才あり、蓋大家は專ばら展張を事として、縝密を屑とせず、務めて一時を網羅するに在り、故に名を成すこと太だ速なり、名家は則ち然らず、心を嘔き骨を鏤し、揉磨太細に、只だ自から慊するを要す、而して強いて人に聒するを喜ばず、故に名、浪に傳はらず、昔人云ふ、顯處に月を視て、牖中に日を窺ふと、此れ學を論ずるの語と雖も、以て大家名家の別に喻ふべきなり。

余、作文を論ずる、獨り因是に心折す、詩に至りては、則ち趨向少しく異なり、因是は專ばら宋を宗とす、大要は金聖歎の法に本き、而して間、出入する者あり、一日酒間に詩を論ず、々として風を生ず、余は、

既而相迫曰、果首肯否、余徐答曰、第俟五里霧裏矣、大笑而止、因是題、牧牛圖云、哥哥南畝戴星歸、姐姐燃燈不下機、爺娘謾道兒無賴、養得孤牛如許肥、頗有古樂府遺音。

唐人如杜韓諸公、皆精熟文選、東坡不喜昭明、然其文字亦有從此出者、此方昔賢亦極崇重此書、著聞集載、勸學院學生會飲、相議曰、今日須不論齒爵、以才品爲序、有藤原隆賴者、直進居上首、諸人紛爭、隆賴曰、文選三十卷、四聲切韻、坐中更有暗誦者否、雖類迂濶、其精難得、近日諸人、多不熟文選、亦何謬也。

祇南海、一夜百首、爲人作備、今時白面書生、纔知綴詩、乃曰我能一夜作幾首、此最可醜、

始め尙は應ぜず、既にして相ひ迫りて曰く、果して首肯するや否やと、余は徐ろに答へて曰く、第、五里霧の霧るゝを俟たんと、大に笑ひて止む、因是の牧牛の圖に題するに云ふ、哥哥々南畝に星を戴いて歸る、姐々燈を燃して機を下らず、爺娘は謾に道ふ兒は無賴と、孤牛を養ひ得て許の如く肥たるに」と、頗る古樂府の遺音あり。

唐人、杜韓諸公の如きは、皆な文選に精熟す、東坡、昭明を喜ばず、然れども其の文字も亦た此より出づる者あり、此の方の昔賢も亦た極めて此の事を崇重す、著聞集に載す、勸學院の學生會飲す、相ひ議して曰く、今日須らく齒爵を論ぜず、才品を以て序と爲すべしと、藤原隆賴といふ者あり、直に進んで上首に居る、諸人紛爭す、隆賴曰く、文選三十卷、四聲切韻、坐中に更に暗誦する者ありや否やと、迂濶に類すと雖も、其の精は得がたし、近日諸人多くは文選に熟せず、亦何ぞ謬れるや。

祇南海の一夜百首は、人の爲めに備を作す、今時白面の書生、纔に詩を綴るを知れば、乃ち曰く、我れ能く一夜に幾首を作ると、此れ最も醜とすべし、夫れ南海の

夫南海才敏、不過一時借此以逞神通耳、猶之武人試射也、伎倆已熟、然後一日千箭、一夜萬箭、皆無不可、伎倆未熟、而妄貪多、弓反肘戰、醜態百出、一無上塚、要之、費精損神、不徒無益、若在聰明才子、則敲銅刻燭、何爲不可、然才子嫌隨人後、必不屑爲此等事也。

南海戲作一文、略云、有客遊冥府、見有大獄、數鬼拿一人、至青衿烏帽、似一秀才、王問何囚、丞對曰、某縣學生某、平生好剽竊他人詩句、修文郎發其事、送臺法究、王怒曰、竊措大眞鈍賊、何處鼎鑊能堪烹汝、乃操觚作判、其詞太長、如詞中所云、全章負去、夜半有力、斷句剽竊、月攘一鷄、潛踰曹劉之垣、擅擊李杜之壘、臚上吟客、卽是梁上君子、社中騷人、不

才の敏なる、一時此を借りて以て、神通を逞くするに過ぎざるのみ、猶ほ之れ武人の射を試むるがごとし、伎倆已に熟して、然る後に一日千箭一萬萬箭、皆な不可なる無し、伎倆未だ熟せずして、妄りに多きを貪らば、弓は反し、肘は戦き、醜態百出して、一も塚に上る無し、之を要するに、精を費し、神を損ず、徒に益なきのみならず、若し聰明才子に在りては、則ち銅を敲き、燭を刻す、何を爲してか不可ならんや、然れども才子は人後に隨ふを嫌ふ、必らず此れ等の事を爲すを屑しとせざるなり。

南海戲に一文を作る、略に云ふ、客の冥府に遊ぶあり、大獄あるを見る、數鬼一人を拿へて至る、青衿烏帽、一秀才に似たり、王問ふ何の囚ぞ、丞對へて曰く、某の縣の學生某、平生好んで他人の詩句を剽竊す、修文郎、其の事を發して臺に送りて法究すと、王怒りて曰く、竊措大、眞の鈍賊、何の處の鼎鑊か能く汝を烹るに堪へんと、乃ち觚を操り判を作る、其の詞太だ長し、詞中に云ふ所の、全章負ひ去り、夜半有力あり、斷句剽竊して、月、一鷄を攘み、潛に曹劉の垣を踰へ、擅に李杜の壘を撃つ、臚上の吟客は卽ち是れ梁上の君子、社中の騷人は月中の仙娥に異ならず、綠楊は遂に綠林

異月中仙娥、綠楊遂成、綠林、紅桃變作、紅巾諸句、其言雖涉諧謔、其諷世亦深矣。

竹枝之盛、昉自余三十首、南海先已有、江南雜咏序云、做竹枝體、但覺未超脫、今傳其三、云十三女兒不解愁、夜隨女伴拜女牛、針線乞得如許巧、裁人嫁衣、秋又秋、孟婆貫月萬丈長、蠶戶占風何渺茫、賈舶漁艇爭入浦、市南商旅夜春糴、自是江南橘柚鄉、耕漁同利滿山霜、千筐萬筐年年綠、笑殺蟠桃千歲香、末一首卻似是橘枝詞。

滕芝山先生宮詞一百首、雖已經刊、世不甚傳、誠者惜焉、今檢其詩、吐屬典雅、幾不在元宮詞下、特錄數首、再以問世、詞云、夜來積雪深盈尺、重疊殿前玉作峰、海日初紅瑞烟麗、

と成り、紅桃は變じて紅巾と作るの諸句の如きは其の言は諧謔に涉ると雖も、其の世を諷る亦た深し。

竹枝の盛なるは、余の三十首より昉まる、南海、先に已に江南雜咏あり、序に云ふ、竹枝の體に做ふと、但、未だ超脫ならざるを覺ゆ、今其の三を傳ふ、云ふ、十三の女兒は愁を解せず、夜女伴に隨ひて女牛を拜す、針線乞ひ得て許の如く巧なり、人の嫁衣を裁す、秋又た秋、孟婆、月を貫いて萬丈長し、蠶戶風を占む何ぞ渺茫たる、賈舶漁艇争ひて浦に入る、市南の商旅、夜、糴を春く、自からはれ江南橘柚の郷、耕漁利を同うす滿山の霜、千筐萬筐年々綠に、笑殺す蟠桃千歳の香と、末の一首は卻て是れ橘枝の詞に似たり。

滕芝山先生の宮詞一百首は、已に刊を経ると雖も、世に甚だ傳はらず、識者焉れを惜む、今其の詩を檢するに、吐屬典雅にして、幾んど元の宮詞の下に在らず、特に數首を錄し、再び以て世に問ふ、詞に云ふ「夜來の積雪深さ尺に盈つ、重疊殿前に、玉、峰を作す、海日初めて紅にして瑞烟麗かなり、外頭時に望む小芙蓉」諸方

外頭時望小芙蓉、諸方花樹貢來新、内苑韶光分外春、等候皇家遊一賞、朝朝灑掃著、緋人、羽林騎士競飛蹄、紅綠兩行裝得齊、緒白連錢疾、如電絕塵一去不聞嘶、輕羅一樣舞衣裳、少府均頒内教坊、準備傳宣不時喚、薰籠常熱水沉香、錦衣親衛奏嚴更、獨倚闌干按玉笙、深夜霜風飄律呂、人間聽得鳳皇鳴、殘臘宮中排法筵、佛名唱遍萬三千、内人簾下催宣賜、如雪新綿被衲肩、先生名世鈞、字守中、余幼時學字師也。

狹貫人物、以滕漆谷荷簡、張竹石徹爲最、二人種種相反、而交道殊厚、滕性溫藉、張性磊落、滕以書勝、張以畫勝、滕有茶癖、張有酒癖、至詩則滕適出、張之上、滕詩極富、姑錄數首、

の花樹貢し來りて新なり、内苑の韶光分外の春、等候す皇家の遊一賞、朝々灑掃す緋を著るの人、羽林の騎士は飛蹄を競ひ、紅綠兩行装し得て齊し、緒白連錢疾きこと電の如し、絕塵一去して嘶を聞かず、輕羅一樣的舞衣裳、少府均しく頒つ内教坊、傳宣不時の喚に準備して、薰籠常に熱く水沉香、錦衣の親衛は嚴更を奏す、獨り闌干に倚りて玉笙を按ず、深夜霜風は律呂を飄へす、人間聞き得たり鳳皇の鳴、殘臘に宮中法筵を排し、佛名唱へ遍し萬三千、内人は簾下に宣賜を催す、雪の如き新綿衲肩に被る」と、先生名は世鈞、字は守中、余の幼なる時に字を學びし師なり。

狹貫人物は、滕漆谷荷簡、張竹石徹を以て最と爲す、二人は種々相反して、交道は殊に厚し、滕の性は溫藉に、張の性は磊落なり、滕は書を以て勝り、張は畫を以て勝る、滕は茶癖あり、張は酒癖あり、詩に至りては則ち滕は適かに張の上に出づ、滕の詩は極めて富む、姑く數首を録す、冬初の偶作に云ふ「風霜は猶ほ未だ霽

冬初偶作云、風霜猶未緊、日色麗清晨、睡與蒲團穩、暖於火閣親、衰蠅點窓紙、殘菓落苔茵、短晷雖如走、晴暄自小春、秋熟云、秋熟、村場新築泥、家家打稻日、將西老饑、別有流涎處、蒼麥花開雪一畦、溪行云、行弄潺湲不道除、蒼苔白石一溪斜、松篁缺處柴門出、杵臼聲幽裂紙家、六言云、幽砌千竿綠竹、明窓一卷黃庭、客來談興、茶熟、雨過眠同、酒醒、盆池水淺、魚冷、香碗灰深、火溫、終日不聞車馬、半生似住山村、俱不減、作者、張詩不抄存、僅記新秋一首云、秋淺桂花猶未香、碧梧葉落夜初長、滿庭風露吟懷爽、占得閒窓一味涼、張亡、滕以詩哭云、同社結交三十年、溘然何計向黃泉、知音隔世人琴失、遺墨留神姓字傳、

ならず、日色清晨麗なり、睡は蒲團と穩かに、暖は火閣に於て親し、衰蠅は窓紙に點し、殘菓は苔茵に落つ、短晷は走るが如しと雖も、晴暄自から小春なり」と、秋熟に云ふ「秋熟して村場新に泥を築く、家々の打稻日將に西せんとす、老饑別に流涎の處あり、蒼麥花は開く雪一畦」と、溪行に云ふ「行、潺湲を弄して除なるを道はず、蒼苔白石一溪斜なり、松篁缺る處柴門出づ、杵臼聲は幽なり紙を製する家」と、六言に云ふ「幽砌千竿の綠竹、明窓一卷の黃庭、客來りて談、茶と熟し、雨過ぎて眠り酒と醒む」「盆池水淺くして魚冷かに、香碗灰深ふして火温なり、終日車馬を聞かず、半生山村に住するに似たり」と、俱に作者に減せず、張の詩は抄存せず、僅かに新秋の一首を記す、云ふ「秋は遠くして桂花猶未だ香しからず、碧梧葉は落ちて夜初めて長し、滿庭の風露吟懷爽かに、占め得たり閒窓一味の涼」と、張の亡するや、滕は、詩を以て哭して云ふ「同社交を結ぶ三十年、溘然何ぞ計らん黃泉に向はんとは、知音世を隔て、人琴失し、遺墨神を留めて姓字傳ふ、酒癖知る君が多く崇りを作すを、詩癡愧つ我が尙ほ顛を成すを、恍然たる一夢身覺むるが如し、又

酒癖知君多作祟、詩癡愧我尙成顛、恍然一
夢身如覺、又被昨遊來現前。

竹石以癸亥出都、畫名大起、明年歸鄉、未幾
沒矣、其在都日、最受知于詩佛、詩佛贈七古
云、竹石道人酒中仙、醉後揮毫妙到神、人人
相見唯驚愕、知者纔是兩三人、世人所見以
形似、道人所貴在神理、世間無復九方臯、誰
識青駝與綠耳、千里來遊關東州、憐君與世
風馬牛磊磊落落性所賦、風流之師俗人贊
莫愁海內無知者、我唯知君君知我、二人相
知已有餘、相得人間醉因果、醉鄉有地萬頃
寬、亦無禮法亦無官、盡日陶陶有何碍、不比
世間行路難、世間豈無能畫士、誰居相忘醉
鄉裡、醉鄉之裡可相忘、瀟灑誰如竹石子、嗚

た昨遊に來りて前に現せらる」と。

竹石は癸亥を以て都に出づ、畫名大に起る、明年郷に
歸る、未だ幾くならずして没せり、其の都に在るの日
に、最も知を詩佛に受けたり、詩佛、古言を贈りて云ふ、
「竹石道人は酒中の仙、醉後に毫を揮ふて、妙、神に到
る、人々相見て唯だ驚愕す、知る者は纔に是れ兩三人、
世人の見る所は形似を以てす、道人の貴ぶ所は神理
に在り、世間復た九方臯なし、誰か知らん青駝と綠耳
と、千里來り遊ぶ關の東州、憐む君が世と風馬牛なる
を、磊々落落々性の賦する所、風流の師にして俗人の贊
愁ふる莫れ海内に知る者なきを、我は唯だ君を知り
君は我を知る、二人相知れば已に餘り有り、相得たり
人間の醉因果、醉郷に地あり萬頃寬し、亦た禮法なく
亦た官なし、盡日陶々として何の碍か有らん、比せず
世間行路の難に、世間豈に能畫の士なからんや、誰ぞ
や相ひ忘る醉郷の裡、醉郷の裡相ひ忘るべし、瀟灑誰
か竹石子に如かん」と、嗚呼詩中に言ふ所の二人相ひ
知る者は、亦た已に陰陽界判す、余、甲子の歲に、尙ほ

呼、詩中所言二人相知者、亦已陰陽界判、余
甲子歲、尙寓伊勢、竹石歸途見訪、客居自此
一別、遂成永訣、今日每與詩佛酒間語及、彼
此愴然、銜益無懼。

庭瀨森岡松蔭、名璋字伯珪、卽鱒齋之昆也、
風調和雅、真不愧爲士衡矣、余不相見、殆十
年餘、頃讀詩冊、如重接眉字、早發松井田云、
出驛滂沱歇、亂雲多在山、溪喧松檜外、路滑
薜蘿間、囊濕奚肩重、與寒客夢憺、曉鷄時一
叫、早已近前關、梅雨偶作云、梅實離離黃熟
時、無朝無夕雨如絲、蒲團坐底醒還睡、書帙
牀頭掩又披、鋤圃空過栽竹日、鑿池恰及種
魚期、酒朋棋敵絕來往、銷遣閒愁惟是詩、二
子長爲足庵、次爲柯亭、兄弟俱耽吟咏、又善

伊勢に寓す、竹石は歸途に客居を訪はる、此の一別よ
り遂に永訣を成せり、今日、詩佛と酒間に語及する毎
に、彼此愴然として、益を銜むも懼なし。

庭瀨の森岡松蔭、名は璋字は伯珪、卽ち鱒齋の昆なり、
風調和雅にして眞に士衡たるに愧ぢず、余、相ひ見ざ
ること殆んど十年餘なり、頃ごろ詩冊を讀むに、重ね
て眉字に接するが如し、早に松井田を發するに云ふ、
「驛を出でて滂沱歇む、亂雲多くは山に在り、溪は喧
し松檜の外、路は滑かなり薜蘿の間、囊濕ふて奚肩重
く、與寒くして客夢憺なり、曉鷄時に一叫し、早く已に
前關に近し」と、梅雨偶作に云ふ「梅實は離々として黃
熟する時、朝と無く夕と無く雨は絲の如し、蒲團坐
底に醒めて還た睡る、書帙牀頭掩て又た披く、圃を鋤
きて空しく過ぐ竹を栽うるの日、池を鑿ちて恰も及
ぶ魚を種うるの期、酒朋棋敵は來往を絶ち、閒愁を銷
遣するは惟、是れ詩」と、二子、長を足庵と爲し、次を
柯亭と爲す、兄弟俱に吟咏に耽る、又た書畫を善くす、

書畫一門清雅如此、真美事也、螻齋無子、以
柯亭繼後。

足庵名玠字介玉、夜坐云、惱人春色好、夜坐
興逾添、單柳烟侵院、描花月上簾、書聊臨讀
帖、詩偶傲香奩、不睡耽清課、輕寒又底嫌、春
晚道中云、籃輿兀兀不成眠、最是黯然欲暮
天、野寺鐘聲遙出樹、溪橋人影薄籠煙、客程
已落飛花後、離恨偏添芳草前、春晚如秋、凄
更甚、又投荒驛聽啼鶻、春夜云、淡月輕煙夜
色奇、梅邊覓句立多時、隔離小犬休驚吠、不
是吾儂儉一枝。

柯亭名珊字頁父、暮春云、遊絲白日靜、籠檻
暖氣醺人、嫋嫋風、燕影飛回新樹外、鶯聲啼
老落花中、詩情似水吟還淡、睡思如雲夢乍

一門の清雅此の如し、真に美事なり、螻齋は子なし、
柯亭を以て後を繼ぐ。

足庵、名は玠、字は介玉、夜坐に云ふ「人を惱して春色好
し、夜坐興逾添、柳を單めて烟院を侵し、花を描い
て月、簾に上る、書は聊か讀帖を臨し、詩は偶々香奩に
傲ふ、睡らずして清課に耽る、輕寒又た底を嫌はんと、
春晚道中に云ふ「籃輿兀々として眠を成さず、最も是
れ黯然たるは暮れんと欲する天、野寺の鐘聲は遙か
に樹を出で、溪橋の人影は薄く煙を籠む、客程已に落
つ飛花の後、離恨偏に添ふ芳草の前、春晚は秋の如く
凄更に甚だし、又た荒驛に投じて啼鶻を聽く」と、春
夜に云ふ「淡月輕煙夜色奇なり、梅邊に句を覓めて立
つこと多時、籬を隔つる小犬驚き吠ゆることを休め
よ、是れ吾儂が一枝を儉むにあらす」と。

柯亭、名は珊、字は頁父、暮春に云ふ「遊絲白日靜、籠
檻靜かなり、暖氣人を醺す、嫋々風の風、燕影は飛び回
る新樹の外、鶯聲は啼き老ゆ落花の中、詩情は水に似
て吟還て淡く、睡思は雲の如く夢乍ち空し、節物何の

空、節物何時不堪惜、獨於春晚恨忽忽、睡起
云、喚夢春鳩谷谷啼、幾重花影掩幽栖、起來
還訝黃昏早、猶是門前日未西、漁家竹枝云、
家家隔柳住、回塘、輕縠波紋映夕陽、女自垂
綸郎盪槳、相見笑指兩鴛鴦。

戊午四月、嬾齋借某家小梅別墅、招邀同社、
一時遊者爲寬齋先生父子、梅外、及余等數
人、各有題詩、先生云、林池碧浸暮天澄、影暗
欄干有客凭、攏岸小舟知底事、黃昏欲點水
心燈、嬾齋云、林莊相伴惜春暉、雨後無花綠
四圍、蛺蝶有情勾引我、香風離外遇薔薇、余
云、綠壓林園斷送紅、階頭一種蕪芳叢、紫雲
朵朵香鋪地、粉蝶低飛三寸風、皆實況也、梅
外詩、偶不省記、追憶爾時光景、宛然在目、園

時か惜むに堪へざらん、獨り春晚に於て忽々を恨
む」と、睡起に云ふ「夢を喚んで春鳩谷々として啼く、
幾重の花影は幽栖を掩ふ、起來還た訝る黃昏の早き
を、猶ほ是れ門前日未だ西せず」と、漁家竹枝に云ふ、
家家柳を隔て、回塘に住す、輕縠の波紋は夕陽に映
ず、女は自ら綸を垂わ郎は槳を盪す、相ひ見て笑つて
指す兩鴛鴦」と。

「戊午四月、嬾齋、某の家の小梅の別墅を借りて、同社
を招邀す、一時遊ぶ者は、寬齋先生父子、梅外、及び余
等數人と爲す、各、題詩あり、先生云ふ、「林池碧は浸し
て暮天澄む、影暗くして欄干に客の凭るあり、岸を攏
する小舟は知る底に事ぞ、黃昏點せんと欲す、水心の
燈」と、嬾齋は云ふ「林莊相ひ伴ふて春暉を惜む、雨後
花なく綠四圍、蛺蝶は情あり我を勾引す、香風離外に
薔薇に遇ふ」と、余は云ふ「綠は林園を壓して紅を斷
送す、階頭一種芳叢を蕪らす、紫雲朵朵、香、地に鋪く、
粉蝶は低飛す三寸の風」と、皆な實況なり、梅外の詩
は偶々省記せず、爾の時の光景を追憶するに、宛然とし
て目に在り、園は、今、他姓に歸す、同社の者は悉なし
と曰ふと雖も、未だ必ずしも俯仰の歎なくんばあり

今歸他姓同社者雖曰無恙未必無俯仰之歎也。

井敬義伯直書宗董文敏自號董堂人但知書法妍妙而不知詩才故自清警中秋無月云幾日祈晴賞月期無如風雨許來癡腹藪今宵不中用又是詩人失意時苦吟云佳句耽來抵死尋涼窓不睡意沉沉庭蟲聲調苦於我風露多邊徹夜吟暮秋云炊煙縷縷兩三家晚樹風寒噪宿鴉寂寞園牆枯蔓底枯樓自把老紅誇。

糸井翼字君鳳號榕齋詩有元人風味惜春云昨日雨天今日風無情春色去忽忽閉門元是非因病只怕人來踏落紅卯花云綠陰深處白成叢占得春梢夏首風一夜前村月

ざるなり。

井敬義伯直書は董文敏を宗とす、自から董堂と號す、人は但し書法の妍妙なるを知りて、詩才も故と自ら清警なるを知らず、中秋無月に云ふ「幾日か晴を祈る賞月の期、如かんとする無し風雨の許來に癡なるを、腹藪今宵川に中らず、又た是れ詩人失意の時」と、苦吟に云ふ「佳句耽り來りて抵死尋ぬ、涼窓睡らず意沈々、庭蟲の聲調は我よりも苦し、風露多き邊に徹夜吟す」と、暮秋に云ふ「炊煙縷々たり兩三家、晚樹風寒くして宿鴉噪く、寂寞たる園牆枯蔓の底、枯樓自から老紅を把りて誇る」と。

糸井翼、字は君鳳、榕齋と號す、詩は元人の風味あり、春を惜むに云ふ「昨日は雨天今日は風、無情の春色去て忽々、門を閉づるは元と是れ病に因るに非ず、只だ怕る人の來りて落紅を踏まんことを」と、卯花に云ふ「綠陰深き處、白叢を成す、占め得たり春梢夏首の風、一夜前村月、水の如し、野人の家は渺茫の中に在り」

如水野人家在渺茫中、病中書懷云、不識此生何惡緣、十年半被病魔纏、秋風一夜睡難穩、夢斷雲山煙水邊。

朝川鼎字五鼎、號善菴、其人窮經、而詩非本色、然亦有佳者、村居書喜云、數間茆屋占林丘、地僻山村心自幽、三口嘗同猿鶴住、一經誰爲子孫謀、麥秋已有終身飽、蠶熟都無卒歲憂、消受清平閒富貴、生涯此外復何求、尤爲淡雅。

竹庵、姓福田、名務廉、余昔日僦居極近、屢蒙庇蔭、其人平生做作不喜、追隊、每曰、那箇使不得、這箇亦不是、始作詩、今遁而歸國、歌、特折服于平春海翁、近又受易于善庵、余翻閱舊篋、得夢後一首、云、檐竹蕭蕭風也生、殘燈

と、病中書懷に云ふ「識らず此の生は何の悪縁ぞ、十年半は病魔に纏はる、秋風一夜睡り穩なり難し、夢は断ゆ雲山煙水の邊」と。

朝川鼎、字は五鼎、善庵と號す、其の人は經を窮めて、而して詩は本色にあらず、然れども亦た佳なる者あり、村居喜を書するに云ふ「數間の茆屋林丘を占む、地僻にして山村心は自ら幽なり、三口嘗て猿鶴と同居す、一經誰か子孫の爲に謀る、麥秋にして已に終身の飽あり、蠶熟して都て卒歳の憂なし、消受す清平の閒富貴、生涯に此の外復た何をか求めん」と、尤も淡雅と爲す。

竹庵、姓は福田、名は務廉、余、昔日僦居極めて近し、屢、庇蔭を蒙る、其の人平生の做作は、隊を追ふを喜ばず、毎に曰く「那箇使め得ず、這箇亦是ならず」と、始め詩を作り、今は遁れて國歌に歸す、特に平春海翁に折服す、近ごろ又た易于善庵に受く、余、舊篋を翻閱して夢後の一首を得たり、云ふ、檐竹蕭々として風也た生ず、殘燈滅せんと欲して乍ら微明、五更夢は覺め

欲減乍微明、五更夢覺膏騰坐、時聞杜鵑和
雨聲、冷峭卻可喜。

桐生、佐羽芳字蘭卿、號淡齋、家道甚豐、而性
好吟咏、余再四相逢、未知其詩、頃詩佛見、投
其一冊、因擲讀之、亦能得宋元風趣者、春日
云、聞中情味淡生涯、午睡醒來到日斜、春社
清明落梅後、東風一半屬梨花、夜泛云、潮於
淡月上時、生舟向碧蘆深處行、憂憂睡禽驚
起去、是鷗是鷺、不分明、村夜云、連枷聲裡夜
方長、秋老村村打稻忙、月滿平田冷如水、寒
光結作五更霜、晚秋足尾山中云、羊腸細路
幾橫斜、松上女蘿紅似花、一綫炊煙隔溪起、
知於山背有人家、熊谷道中云、急喚村翁澆
客愁、酒家樓上雨初收、青山無數長不老、怪

て膏騰として坐す、時に聞く杜鵑の雨に和する聲」と
冷峭卻つて喜ぶべし。

桐生の佐羽芳、字は蘭卿、淡齋と號す、家道甚だ豊な
り、而して、性吟咏を好む、余は再四相ひ逢ふも、未だ
其の詩を知らず、頃ごろ詩佛、其の一冊を投ぜらる、
因て之を擲讀するに、亦た能く宋元の風趣を得る者
なり、春日に云ふ「聞中の情味淡生涯、午睡醒め來り
て日斜に到る、春社清明落梅の後、東風一半は梨花に
屬す」と、夜泛に云ふ「潮は淡月の上る時に於て生じ、
舟は碧蘆の深き處に向つて行く、憂々として睡禽は
驚起し去る、是れ鷗是れ鷺分明ならず」と、村夜に云ふ
「連枷聲裡夜方に長し、秋老いて村々打稻忙はし、月
は平田に満ちて冷、水の如し、寒光は結んで五更の霜
と作る」と、晚秋の足尾山中に云ふ「羊腸たる細路幾
横斜、松上の女蘿紅、花に似たり、一綫の炊煙は溪を
隔てゝ起る、知る山背に於て人家有るを」と、熊谷道
中に云ふ「急に村翁を喚んで客愁に澆く、酒家樓上雨
初めて收る、青山無數長へに老はず、怪しむ芙蓉の獨
り白頭なるを、」

底芙蓉獨白頭。

秋艇字荷隱、有香隱體詩一卷、夜泛云、探借清秋月滿空、扁舟占盡菱荷風、芳心一點君知否、欲伴鴛鴦一夢中、別後云、別後鸞衾睡未成、子規忽得妾心驚、歸舟下水今何處、啼到郎邊第幾聲。

宋詩紀事載、楊后宮詞云、涼秋結束鬪清新、宜入毬場尙未明、一朵紅雲黃蓋底、千官下馬起居身、庚眞相通、古詩儘有、唐宋諸家、近體出韻者、多置之首句、此詩獨在第二句、係所罕見、余謂明字作晨、本自妥貼、不知何苦乃如此。

少陵云、李杜齊名眞黍稷、李杜之竝稱、至今炳如日月、誠齋云、誰把尤揚語同日、不教李

秋艇字は荷隱、香隱體の詩一卷あり、夜泛に云ふ「清秋を探借して月、空に滿つ扁舟占め盡す菱荷の風、芳心一點君知るや否や、伴はんと欲す鴛鴦一夢の中」と、別後に云ふ「別後の鸞衾睡未だ成らず、子規忽ち妾の心をして驚かしむ、歸舟水を下る今何の處ぞ、啼いて郎が邊に到るは第幾聲ぞ」と。

宋詩紀事に載す、楊后宮詞に云ふ「涼秋結束して清新を鬪はしむ、宜して毬場に入りて尙ほ未だ明かならず、一朵の紅雲黃蓋の底、千官馬より下る起居の身」と、庚眞相ひ通す、古詩に儘有り、唐宋の諸家近體出韻の者多くは之を首句に置く、此の詩は獨り第二句に在り、罕に見る所に係る、余謂へらく、明の字晨に作らば、本と自ら妥貼なり、知らず何を苦んで乃ち此の如くなるや。

少陵云ふ「李杜名を齊ふす眞に黍稷」と、李杜の竝稱するは、今に至りて炳として日月の如し、誠齋云ふ「誰か尤揚を把て同日に語る、李杜をして獨り名を齊ふ

杜獨齊名、楊詩今孤行、而尤期殘缺無傳、詩人有幸不幸如此、豈非天乎。

偶閱書肆、見古今二鳴編一本、係安永丙申年刻、合集惟忠萬庵二僧詩者、忠與義堂絕海同時、咏鷗云、世上風波險於海、莫隨鷗鷺到朝班、與宋人絕句、寄語沙邊鷗鷺群、也須從此斷知聞、諸公有意、除鈎黨甲乙、推排恐到君、用意相近、萬詩世有江陵集、全蹈襲明七子、此編所載、絕不相類、如五言云、細雨抽蘭葉、微風綻杏花、茶鼎鳴還息、竹窓晴忽陰、古廟馴狐出、寒枝怪鳥啼、七言云、村煙籠樹市聲遠、野水拍堤山影寒、巖罅月明松風出、牆陰風度木犀香、松影布雲知月上、簾紋凝水覺涼生、雁雲蛩雨秋將老、白髮青燈意未

せしめず」と、楊の詩は今孤行す、而して尤は則ち殘缺して傳ふる無し、詩人幸不幸あること此の如し、豈に天に非ずや。

偶、書肆を閲して古今二鳴編一本を見る、安永丙申年の刻に係る、惟忠萬庵二僧の詩を合集する者なり、忠は義堂絶海と時を同うす、鷗を咏するに云ふ「世上の風波は海よりも險なり、鷗鷺に隨ふて朝班に到ること莫れ」と、宋人の絶句の「寄語沙邊鷗鷺の群也」た須らく此より知聞を斷つべし、諸公は鈎黨を除くに意あり、甲乙推排して恐らくは君に到らん」と、用意相ひ近し、萬の詩は世に江陵集あり、全く明の七子を踏襲す、此の編に載する所は、絶えて相類せず、五言に云ふ「細雨、蘭葉を抽き、微風、杏花を綻ぼす」一茶鼎鳴りて還た息む、竹窓晴れて忽ち陰る「古廟馴狐出で、寒枝怪鳥啼」と、七言に云ふ「村煙は樹を籠めて市聲遠く、野水は堤を拍ちて山影寒し」巖罅月は明にして松風出で、牆陰風は度りて木犀香し、松影は雲を布きて月の上るを知り、簾紋は水を凝らして涼の生ずるを覺ゆ「雁雲蛩雨秋將に老いとす、白髮青燈意未だ平ならず、」枕上時ありて句律を排し、燈前

平、枕上有時排句律、燈前無事檢醫方、功名強醉猩猩酒、祿位爭營燕燕寔、皆有放翁風味、蓋萬晚年歸依宋詩、自云、深慙往見之謬、此與王弇州臨終猶手握蘇子瞻集一般見解、亦幾乎朝聞夕死之意矣、世尙有宿儒皓首迷而不復者、不已駭乎。

近今關東詩、僧天華名最著、余想見其詩鴻富、頃托因是索讀其集、華辭以不存稿、因思比來緇流、自刊其詩以求售者亦多、而華獨悠然付之鏡花水月、其高致可尙、因是爲余僅誦其咏棋一聯云、西楚重墮猶有敗、湘東一目竟無成、且云是其得意句、余曰、已探此驪珠矣、縱有他作、亦不必須、按、錢虞山棋詩、有重墮尙有烏江敗、莫笑湘東一目人之句、

事なく醫方を檢す、二功名強いて酔ふ猩猩の酒、祿位争ふて營む燕々の寔」と、皆な放翁の風味あり、蓋、萬は晩年に宋詩に歸依す、自ら云ふ、深く往見の謬を慙づと、此れ王弇州が終りに臨み猶ほ手に蘇子瞻の集を握ると一般の見解にして、亦た朝に聞きたり死するの意あり、世に尙ほ宿儒の皓首にして迷ふて復らざる者あり、已だ駭ならずや。

近今關東の詩は、僧天華の名、最も著はる、余、其の詩の鴻富を想見せり、頃、こゝろ因是に托して其の集を讀まんことを索む、華、辭するに稿を存せざるを以てす、因て思ふ、比來緇流、自ら其の詩を刊して以て售らんことを求むる者亦た多し、而して華は、獨り悠然として之を鏡花水月に付す、其の高致は尙ぶべし、因是は余の爲めに僅に其の棋を咏する一聯を誦す、云ふ、「西楚の重墮猶ほ敗あり、湘東の一目竟に成る無し」と、且つ云ふ、是れ其の得意の句と、余曰く、已に此の驪珠を探れり、縱ひ他作あるも、亦た必ずしも須ひずと、按ずるに錢虞山の棋の詩に「重墮尙ほ烏江の

方知聰明才思自然有此暗合、世或目以「惠崇」矣。

又有玄暉者、暉住持山王成就院、初受業於源琴臺、而詩特爲出藍、雨晴至園中云、村園十日雨和風、春盡陰陰漠漠中、筍挺短長細、脫錦梅肥濃、淡臉潮紅、鶯聲燕語新晴景、蝶意蜂情嫩綠叢、詩思今朝尤快活、小吟閒立竹籬東、晚晴卽事云、雨過水聲喧、小塘虹銷雲綽漏、斜陽苦心尋、句真多事、兀坐看蓮占、晚涼暉、每月爲詩會、余一趨之、名流滿坐、都不及省記、只記田秀實字世華者、年甫十五、六、自云、爲日比東湖門人、誦其江村秋晚一絕云、蕭疎殘柳襯餘霞、七八漁家雜酒家、淺水繫船人去盡、一雙白鷺立蘆花。

敗あり、笑ふ莫れ湘東一日の人の初あり、方を知る、聰明才思、自然に此の暗合あり、世或は目するに、惠崇を以てするは謬れり。

又た玄暉といふ者あり、暉は、山王成就院に住持たり、初め、業を源琴臺に受け、而して詩は特に出藍と爲す、雨晴れて園中に至るに云ふ「村園十日、雨、風に和す、春は盡く陰々漠々の中、筍は挺して短長細錦を脱し、梅は肥えて濃淡臉紅を潮す、鶯聲燕語新晴景、蝶意蜂情嫩綠叢、詩思今朝尤も快活、小吟閒立す竹籬の東」と、晚晴卽事に云ふ「雨過ぎて水聲、小塘に喧し、虹銷へて雲綽、斜陽を洩らす、苦心句を尋ぬ真に多事、兀坐蓮を看て晚涼を占む」と、暉、毎月詩會を爲す、余一たび之に趨く、名流、坐に滿つ、都べて省記するに及ばず、只だ田秀實字は世華といふ者を記す、年甫めて十五六、自ら云ふ、日比東湖の門人たりと、其の江村秋晚の一絶を誦す、云ふ「蕭疎たる殘柳は餘霞を襯す、七八の漁家は酒家に雜はる、淺水に船を繫ぎ人去り盡し、一雙の白鷺は蘆花に立つ」と。

余每逢閨秀詩、必抄存以廣流傳、東湖有女弟子林氏文鳳者、年未及笄、頗善吟咏、平生讀書有儒素風、又學書法於東洲老人、殊爲秀媚、春晚云、野杏山桃亂晚風、一年春事太匆匆、癡心卻愛蜘蛛巧、更吐纖絲絨、墜紅、其最可喜者、有人持扇索題、清楊次也、西湖竹枝者、文鳳以詩拒之、曰、扇頭求字愧君知、欲寫還嫌多豔詞、瓜李由來人所慎、嬾書次也、竹枝詩、真清操女子也。

列朝詩載、海陵生集、滄溟語、戲作漫興一律、有一先生詩、尙株守滄溟、余亦傲海陵生所爲、賦示云、搖落高秋色、交遊好更論、江湖仍睥睨、風雨自乾坤、白雪文章在青雲、意氣存君才、元鑿鑿、萬里動中原、其人拜謝、只道高

余、閨秀の詩に逢ふ毎に、必ず抄存して以て流傳を廣む、東湖に女弟子林氏文鳳といふ者あり、年は未だ笄するに及ばず、頗る吟咏を善くす、平生書を讀み、儒素の風有り、又た書法を東洲老人に學ぶ、殊に秀媚と爲す、春晚に云ふ「野杏山桃晚風に亂る、一年の春事太だ忽々、癡心卻て愛す蜘蛛の巧、更に纖絲を吐いて墜紅を緘す」と、其の最も喜ぶ可き者は、人の扇を持して清の楊次也が、西湖竹枝を題せんことを索むる者あり、文鳳詩を以て之を拒んで曰く「扇頭に字を求む君が知を愧づ、寫さんと欲して還た嫌ふ豔詞多きを、瓜李由來人の慎む所、書するに嬾ふし次也が竹枝の詩を」と、真に清操の女子なり。

列朝詩に載す、海陵生、滄溟の語を集めて、戲に漫興一律を作る、一先生あり、詩、尙ほ滄溟を株守す、余も亦た海陵生の爲す所に倣ひ、賦示して云ふ「搖落、秋色高く、交遊好し更に論せん、江湖仍ほ睥睨、風雨自から乾坤、白雪文章在り、青雲、意氣存す、君が才は元と鑿鑿、萬里中原を動かす」と、其の人拜謝し、只道ふ高調高調と、復た其の戲たるを辨せざるなり。

調高調、不復辨其爲戲也。

元寶以後、作者極多、余流覽諸集、特拾收世所吐棄絕句若干首、以示羊裘之嗜、其作者姓名、槩不錄出、令讀者猜、是何人之作、其詩云、昨日公門債債歸、菜花滿眼杏花稀、陽坡曠背軟莎穩、不、信人間有錦衣、古墓無人識、姓名、玉魚何處鎖、佳城、只餘、一片看碑路、春草年年避不生、不、向江邊泛羽觴、雨中閉戶日偏長、松煤磨出桃花露、臨得蘭亭字幾行、亭在荷花深處頭、滿襟詩思爽、於秋沙禽畢竟苦、何熱、浴向波心、不、暫休、深宮輕襲紫羅裙、睡後浴前春未分、自是君王貪晝寢、綠鬢終日不爲雲、綠壓紗窓冷透衣、黃鸝無語雨霏微、濕紅也解留春住、粘著枝頭未肯飛、豈

元寶以後、作者極めて多し、余は諸集を流覽して、特に世の吐棄する所の絶句若干首を拾集して、以て羊裘の嗜を示す、其の作者の姓名は、槩して録出せず、讀者をして是れ何人の作なるを猜せしむ、其の詩に云ふ「昨日公門に債債て歸る、菜花は滿眼杏花は稀なり、陽坡に背を曠して軟莎穩かに、信せず人間に錦衣あるを」古墓、人の姓名を識るなし、玉魚何の處にか佳城を鎖さず、只だ一片碑を看るの路を餘して、春草年々避けて生せず、「江邊に向つて羽觴を泛べず、雨中に戸を閉ざして日偏に長し、松煤磨し出だす松花の露、臨し得たり蘭亭の字幾行」亭は荷花深き處の頭に在り、滿襟の詩思、秋よりも爽なり、沙禽は畢竟何の熱に苦しむ、浴して波心に向つて暫くも休せず「深宮軽く襲す紫羅裙、睡後浴前春未だ分たず、自らはれ君王晝寢を貪る、綠鬢終日雲と爲らず」緑は紗窓を壓して、冷衣に透る、黃鸝語なく雨霏微、濕紅也た解す春を留めて住するを、枝頭に粘著して未だ肯て飛ばず「豈花籬落早涼生ず、柳葉園林積雨晴る、衰々人は塵裡より老ゆ、沉々詩は靜中に向つて成る」

花籬落早涼生、柿葉園林積雨晴、袞袞人從
 塵裡老、沉沉詩向靜中成、金粟花開月滿枝、
 風來特地弄香吹、夜深人靜欄干上、獨有涪
 翁鼻孔知、竹浦暮寒鶉鷓飛、炊煙一綫隔林
 微、龍王祠上大星見、浣婦獨穿蘆荻、歸高樹
 亂蟬過雨餘、歸雲獨鳥夕陽初、山齋六月不
 知暑、脩竹陰濃學草書、涼意宜人秋乍回、晚
 雲分雨帶輕雷、珊瑚灑向池庭上、傾出明珠
 數斛來、歲月何殊下坂丸、一年只有一宵殘
 癡默於我全無用、賈與他人亦不安、應是子
 規啼不眠、聲聲聽到五更天、如今縱斷姜腸
 盡、莫破良人歸夢圓、景入朱明積雨餘、熟梅
 三五落階除、綠陰更喜薰風轉、開遍南窓晒
 架書、河影微微殘月斜、林梢隨處起、栖鴉夢

「金粟花開いて、月、枝に満つ、風來りて特地に香を弄して吹く、衣深く人靜に欄干の上、獨り、涪翁鼻孔の知る有り」竹浦暮寒くして鶉鷓飛ぶ、炊煙一綫林を隔て、微なり、龍王祠上に大星見ゆ、浣婦は獨り蘆荻を穿ちて歸る「高樹亂蟬過雨の餘歸雲獨鳥夕陽の初、山齋六月暑を知らず、脩竹陰濃にして草書を學ぶ」涼意人に宜しくして秋乍も回る、晚寒雨を分ちて輕雷を帶ぶ、珊瑚として灑いで池庭の上に向ひ、明珠數斛を傾出し來る「歲月は何ぞ殊ならん坂を下るの丸に一年只一宵の殘るあり、癡默我に於て全く用無し、他人に賈與するも亦た安からず」應に是れ子規啼いて眠らざるべし、聲々聽いて五更の天に到る、如今縱ひ姜の腸を斷ち盡すとも、良人歸夢の圓なるを破ること莫れ「景は朱明に入る積雨の餘、熟梅三五階除に落つ、綠陰更に喜ぶ薰風の轉するを、南窓を開遍して架書を晒す」河影微微々として、殘月斜なり林梢隨處に栖鴉起る、夢回りに馬背天初めて白し、村店の鷄鳴は杏花を隔つ「東菑餉を遺つて桑陰に坐す、梅子は彈の如く、秧は針に似たり、雙鷺は拳を聯ねて水の淺きを窺ひ、孤牛は鼻を浮べて溪の深きを怯る」豆隴風を承け

回馬背天初白、村店鷄鳴隔杏花、東菑遺餉
 坐桑陰、梅子如彈、秧似針、雙鷺聯拳窺水淺、
 孤牛浮鼻怯溪深、豆隴承風桐葉亂、茄畦經
 雨晚花開、講帷人散南堂靜、坐見秋蜂度竹
 來、鴈聲喚夢曉過樓、屏背殘缸照未收、露滿
 中庭人獨立、黯陰綻出白牽牛、烏合原頭黃
 鳥飛、荒山春老草初肥、穆公一去秦良盡、無
 限丘墳知者稀、御香欲襲翠雲裘、長捲衣裳
 侍殿頭、隨例朝朝傅粉黛、十年請盡漢宮秋、
 徹夜船窓足雨聲、一燈遙認是州城、依稀半
 記還家夢、夢覺時聞柵鎖鳴、鐵檠紙帳坐更
 闌、雪意將成特地寒、聞得窓前聲簌簌、喚童
 急問竹平安、秋水菱花前殿開、昭陽歌舞夜
 闌回、深宮浴罷纔看月、阿監已過重闌來。

三六
 て稠葉亂れ、茄畦雨を経て晩花開く、講帷人散じて南
 堂靜なり、坐して見る秋蜂の竹を度りて來るを「鴈聲
 夢を喚んで曉に樓を過ぐ、屏背の殘缸照らして未
 だ收まらず、露は中庭に滿ちて人獨立す、黯陰綻び出
 だす白牽牛」烏合原頭黃鳥飛ぶ荒山春老いて草初め
 て肥ゆ、穆公一たび去りて秦良盡き、限りなきの丘墳
 知る者稀なり「御香襲はんと欲す翠雲の裘、長く衣裳
 を捲いて殿頭に待す、例に隨つて朝々粉黛を傳ぐ、十
 年請んじ盡くす漢宮の秋」徹夜船窓に雨聲足る、一燈
 遙に認む是れ州城、依稀として半ば記す還家の夢、夢
 覺めて時に聞く柵鎖の鳴るを「鐵檠紙帳更の闌なる
 に坐す、雪意將に成らんとして特地に寒し、聞き得た
 り窓前聲簌々、童を喚んで急に問ふ竹の平安」を「秋水
 菱花前殿に開き、昭陽の歌舞は夜闌にして回る、深宮
 浴し罷んで纔に月を看る、阿監已に重闌を過ぎて來
 る。

五山堂詩話卷二終

五山堂詩話卷二